

幼 兒 教 育



第 二 卷 第 二 號 第 二 號

東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內

日 本 幼 稚 園 協 會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編 (再版)

觀察の實際

菊判 一三〇頁
定價 金壹圓
送料 東京 金六錢
市内 金九錢
其他 金九錢

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に何ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集 (四版)

菊版 三五〇頁 定價 金壹圓五拾錢
送料 市内 金六錢
地方 北海道・臺灣・朝鮮・滿洲 金拾五錢
樺太・朝鮮

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

系統的保育案の實際 (四版)

定價 金壹圓
送料 金六錢

幼兒の教育 (月刊)

一ヶ月 金參拾五錢 送料 金一錢
一ケ年 金四圓貳拾錢 送料 共

生徒募集

本科生四十名

研究生若干名

願書受付三月二十日迄規則書は参錢切手の封入の上申込まれよ。

創立以來廿五年。

大正五年東京市麴町區に創立。

昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、

附近に森あり、野あり、川ありて四時自

然の恩恵を受け、本校の特色とする自然

觀察、博物採集、圖書寫生、自然物應用

の手工等材料豊富なり。

玉成保姆養成所

所長 ソファヤ・アラベラ・アルウ井ン

東京市杉並區西高井戸一丁目一三三

省線 西荻窪下車直南約五丁

生徒募集

一定員七拾名

一出願期限 三月末日迄

規則竝ニ入學案内ハ三錢切手封入申込マレタシ

東京市品川區大井原町五二〇八(省線大井原驛ヨリ城南バ
スニテ原停留場下車二分)

東京昭和保姆養成所

所長 土川 五郎

顧問 兼 講師 倉橋 惣三
東京女子高等師範教授

保姆生徒募集

一、定員 六十名

一、卒業 一ケ年

一、特典 無試験檢定ニテ保姆免許狀ヲ授與セラル

一、入資格 高等女學校卒業ノモノ(但シ聽講生ニハ資格ナシ)

一、期日 二月一日ヨリ願書受付ク

詳細ナル規則書等入用ノ方ハ參錢切手ヲ同封シテ請求セラレタシ

東京市淀橋區下落合三丁目一、三三八

東京目白保姆學校

電話、落合長崎二、五五九番
振替口座 一〇、八三七

〔最新刊〕

幼稚園の園

大和郷幼稚園

坂内ミツ先生著

四六判上製・全入一冊
定價一・五〇 送料一・〇〇

生活

天真爛漫神のやうな子供達、幼稚園の生活はたゞ見れば明るい幸福に満ちあふれてゐます。然しこの天使のやうな子供達の指導はなんと難かしいこととせう。著者はこの同じ立場にある人々のために廿餘年間の體驗から得た秘訣を公にされました。大きな慈愛に輝き、細心の注意に充ちた本書は皆様の疑問、悩みをたちどころに解決するでせう。

- 一次目要主一
- 一 幼稚園の目的及必要
 - 二 私の理想とする幼稚園
 - 三 幼稚園の組織
 - 1 先生(保姆)
 - 2 幼児
 - 3 園舎
 - 4 設備
 - 5 編成
 - 6 一日の生活

四 良い幼稚園

幼稚園教育論

法政大學 教授 城戸幡太郎先生著

【最新刊】 一・八〇
一・四〇

興亞日本の建設發展のために輝ける本書を全保育人に贈る！

健全なる國民の育成こそは幼児の保育よりスタートせねばならぬ。強く正しく導くために、幼児教育の新組織を樹立し、全問題を解明した最も科學的な幼児教育論である。

〔内容見本進呈〕

- 五 保育上の注意
- 1 觀察
 - 2 談話
 - 3 唱歌
 - 4 手工
 - 5 躑躅方
 - 6 遊戲
 - 7 躑躅方
 - 8 年中行事
 - 9 自由遊び

六 結論

賢文館

東京電話
九段五
田段五
一・四〇
橋六八〇

生徒募集

△定員 六十名

△保母無試験檢定

△締切 三月二十日

△寄宿舎完備

佛教保育協會

中野保母養成所

東京市中野區宮前町 電話中野五八七〇番

△帝都ノ名刹中野寶仙寺境内ニ同寺經營ノ中野高等女學校並

感應幼稚園ト共ニ併設セラレ環境ノ清澄ト設備ノ完備セル

ハ本所ノ誇リデアル

△交通ハ省線新宿驛ヨリ五分

△學則請求要三錢

幼兒童話及幼兒唱歌募集

— フレーベル賞による懸賞募集 —

先年株式會社フレーベル館高市社長より同館創業三十周年記念として、保育資金一千五百圓を全國保育界に對して提供せられ、その使途につき本會に委託せられましたことは度々本誌上に御報告申上げた通りであります。よつて本會はそのため特に實行委員諸氏を御委嘱し、協議の上、童話手技等の懸賞募集を行ひ來り、いづれも好成績を擧げましたことも御承知頂いてゐるに存じます。今回は更に募集範圍を擴大して、幼稚園の方々の外、小學校教育御關係の方々にも御應募を乞ふことゝしました。廣く多數の優秀作品を得たいと期待して居ります。左の規定により盛に御應募下さるやう願ひます。

(一) 童話募集規定

- 應募作は幼兒に適する童話たること。
 - 主題、内容、長短は隨意。
 - 幼稚園、託兒所保母諸君及び小學校教員諸君の自作たること。(舊作にてもよろし)
 - 應募篇數任意。お一人にて兩方に應募せらるゝこと素より任意。
 - 原稿紙にペン書のこと。
 - 應募者は宿所、氏名(誌上匿名隨意)及び奉職園校の名稱、所在地を明記のこと。
 - 日本幼稚園協會(東京市小石川區東京女子高等師範學校附屬幼稚園内)童話募集掛宛のこと。
- 締切 昭和十五年二月末日

發表 昭和十五年六月一日本會發行の「幼児の教育」誌上。

入選作は本誌に掲載し、賞状及賞金を贈呈します。

フレーベル賞

一等一名金參拾圓 二等一名金貳拾圓 三等一名金拾圓 選外佳作若干名(賞品贈呈)

審査(五十音順)

小川未明氏 及川ふみ氏 岸邊福雄氏 倉橋惣三氏 葛原 齒氏 久留島武彦氏

原稿は一切返却しません。

尚御不明の點は往復はがきで本會重話募集掛宛お問合せ下さい。

(二) 幼兒唱歌募集規定

應募作は幼兒にうたはせるに適するものたること。

主題、内容、長短は隨意。

幼稚園、託兒所保姆諸君及び小學校教員諸君の自作たること。(舊作にてもよろし)

應募篇數任意。お一人にて兩方に應募せらるゝこと素より任意。

原稿紙にペン書のこと。

應募者は宿所、氏名(誌上匿名隨意)及び奉職園校の名稱、所在地を明記のこと。

日本幼稚園協會(東京市小石川區東京女子高等師範學校附屬幼稚園内)幼兒唱歌募集掛宛のこと。

締切 昭和十五年二月末日

發表 昭和十五年六月一日本會發行の「幼児の教育」誌上。

入選作は本誌に掲載し、賞状及賞金を贈呈します。

フレーベル賞

一等一名金參拾圓 二等一名金貳拾圓 三等一名金拾圓 選外佳作若干名(賞品贈呈)

審査(五十音順)

小川未明氏 及川ふみ氏 岸邊福雄氏 倉橋惣三氏 葛原 齒氏 久留島武彦氏

原稿は一切返却しません。

尚御不明の點は往復はがきで本會幼兒唱歌募集掛宛お問合せ下さい。

昭和十五年二月

東京市小石川區東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會

石 森 延 男 著

東京市神田區神保町三丁目一九
大阪市住吉區北田邊町三〇六

横 山 書 店

幼な子へのお話

四六版二百五十頁
色刷美術挿繪八葉
裝 禎 瀟 洒

Y. 1.60

お母さんや幼児の先生方は、お子さんたちから、お話をせがまれないでせうか。お話がなくなつてお困りにならないかしら。そんな時には、どうすればいいのか、どうすればお話が作れるやうになるのか。この本は、そのことについてわかりやすく丁寧に書いてあるそれは美しい手引書であります。

推薦の言葉

倉橋惣三先生

お母さんにお話をきかせていただくことは、子どもの大きな幸福である。しかもその幸福は、お母さんの方に、もつと大きいかもしれない。この幸福に氣がねしてゐるお母さんが必ずしも少くない。「お話をしらないから。」そんなことに氣おくれしては、わが子の求める幸福を與へかねたり自分の幸福を我まうけかねたりしてゐる。「お話なんてそんなにむづかしいものではありませんよ。」さいひながら、にこやかに相談相手にならうとしてゐるのがこの本である。本書が、お母さん方の幸福を増すことを疑はないと共に、幼児の先生にも、姉さんにも、ぜひ薦めたいと思ふのは私ばかりではあるまい。



第十四卷 幼 兒 の 教 育 第 二 號

—(次 目)—

扉	幼稚園の家庭教育補導	倉橋惣三(一)
	人を信じてかゝる心	齋藤善太郎(三)
	二月の幼児童謡	葛原しげる(九)
	古品の御照會	仙臺市東二番丁附屬幼稚園(七)
	お雛様	及川ふみ(二〇)
	冬の満洲	
	満洲の冬ま保育の實際	小山田節(二三)
	園庭寸描	日高テイ(二六)
	童話・岸邊福叟名話集	倉橋惣三(二七)
	お話遊び二つ	徳久智江子(三〇)
	困つてるこゝ・困つてる子	岩木さよ(三〇)
	室内遊び	町田行子(三三)
	月刊「幼児の母」の計畫に就て	倉橋惣三(三三)
	幼児の母	(四四)
	幼時の追憶	曾根保(四六)
	ハイデイ——ヨハンナ・スピリ原作——	津田芳雄譯(五二)

靜寛院宮幼時の御姿に擬せ「鏡様」人形の頒布



「一女子ノ身ヲ以テ國難ヲ匡濟スルノ用ニ供スルコトヲ得バ水火ノ中ニ投ズルモ辭セズ」ニ悲壯なる決意を以て、徳川十四代將軍家茂公に御降嫁遊ばされたる和宮様、後の靜寛院宮様こそは、洵に我が殉國犠牲の象徴にして、又その貞烈淑正の令徳は萬代婦道の典型として國民齊しく仰ぎ奉らねばならぬことであります。

今回本會に於ては宮様御婦徳宣揚の一助として「鏡様」人形を廣く同好の士に頒布することにいたしました。此の御人形の原型は宮様の側近者を出せる正六位法有字家所藏にかゝる由緒深き御人形にして、人形製作の大家山田徳兵衛氏が謹製したるものであります。尙此の御人形の原型は國定教科書小學國語讀本卷十二にも登載され宮様の尊容を偲び奉る史料の確實なるものはこれ以外にはないものであります。又本人形の添書中には宮様の御眞蹟の對鏡の御歌を奉載し、題字は御宗家徳川公夫人泰子の直筆にかゝるものであります。

冀くば江湖の諸賢の御贊同により廣く一般家庭・幼稚園・小學校・女學校等に奉安されんことをおすゝめ致します。

「鏡様」人形

御身長 鬚先まで 曲尺六寸五分 金拾八圓也
 黒塗臺及び桐箱付

送料 東本市内 十二錢 樺太・臺灣 六十二錢
 内地一般 二十一錢 朝鮮・滿洲國

但し代金引替の場合 十八錢増

推薦

倉橋惣三

幼稚園の雛棚へ「鏡様」を加へたいものです。飾るには一番上の段、親王様のお近くの方へならべて飾るのが正式だと、その道の人に教へて貰ひました。昨年も澤山御希望がありました。皆さんの幼稚園にも今年から是非、お薦めします。

頒布先

東京市芝區芝公園増上寺中
 財團 法人 靜寛院宮奉讚會

取次所

日本幼稚園協會

電話 大塚三一四二番
 振替口座東京一七二六六番

幼 兒 の 教 育

昭 和 五 十 二 年 二 月



タコアケ

わたしは、この繪を見た時、始めは何んの氣もなく見過ごさうとした。もう一度見直して、なんとなく氣をひかれた。更によく見てゐる中に、一種特別の微笑が込み上げて來るのを禁じられなくなつた。組の先生に、この子は見さんがあるのですかと聞いてみたら、そうですといふことである。わたしは、此の繪を、たゞの微笑だけでは見られないと思ひ出した。

颯はあけてこそ面白い遊びである。それをいつもノ、持ち役の方にばかり廻されてゐる此の子の心もちは……。といつて必ずしもそう不満といふ譯でもなく、これが妹の受持ちと思ひ、これが妹の颯遊びと思ひ、兄さんが、よく揚げればいゝと思ひ、おとなしく、颯をもち上げて、颯を待つてゐる心もちは……。何んといふ心理畫なのであらう。子ども繪にも、子どもらしいながら、こんなにも複雑な心持ちを描くものなのか。勿論小さい畫家自身それを意識してはゐまいが。

わたしは、もう一度この繪をみつめた。

(倉橋惣三)

幼稚園の家庭教育補導

倉 橋 惣 三

幼稚園の任務が、園内幼児生活の保育に止まるものでなく、その幼児達の家庭教育補導に意を用るなければならぬことは、豫て屢々説き來つたことである。しかも、その必要は愈々大なるものがあり、一層力を入れて主張せざるを得ないことを感ずる。

先づ家庭教育の重要性が主問題であるが、それは茲に更めて説くまでもあるまい。たゞ、實際の問題として、社會的施設の發達に伴ひ、その方への力點が強調せられ、強化せられると共に、（それは極めて大切のことであるが）人間生活の根本、殊に人間教育の本據たる家庭の充實に對し、それと併行的に力を盡すことが、往々忘れ勝ちになるのである。吾人素より、現代の家庭生活の缺陷を熟知してゐる。そこに子女を托して安心し得ない點の多いのをよく知つてゐる。しかし、それだからといつて、その補ひを外で、即ち社會施設で、つけるだけでいゝといふことは決して出来ない。當面の補充として、社會施設に俟つべきと共に、もつと遠い慮り、深い念ひとしては、家庭生活の教育性そのものへの著眼を、絶えず持ちつゞけなければならぬ。それが、さうも、慮りの遠さ、念ひの深さに於て足りなかつたりし易いのである。甚だ卑近の例をひくやうであるが、たまへば疾患の治療に於て、藥物的方法の必須であることのみを思ひ、その當面的効果のみに力を用る、その人の生活全體に就ての意の用る方が足りないでは、眞にその人を健康にすることは出来ない。しかも、そうした當面的方法に偏して、それで事終れりとする場合が、必ずしも稀でないのである。

二

託兒所發達の初期に於て、その施設者の意圖が、往々にして逆用せられ、逆効果を來して、家庭の教育的稀薄を來し、託兒所は家庭教育の破壊作用をもつたといふ。こんなでもない批難がされたりしたものである。これは施設者の罪か親の

不都合か、そのいづれであるかといふよりも、互の相關現象であつたのであらう。そこで、託兒所は家庭教育補導を、その主眼點の一つに置かなければならぬといふ主張が、そうしてその爲の工夫が凝らされるやうになつたのである。しかも、まだくその點に於て不用意なる場合が少なくなく、社會政策の名に於て、家庭を忘れてゐることがあるのである。そこで、「託兒所の家庭教育補導の責務」いふことは、最も緊急な警告でなければならぬ。託兒所が對象とする幼兒の家庭は、家庭としての教育的充實に於て、恐らく遺憾とする點が顯著なのであるからである。

ところで幼稚園の場合であるが、この點に於て實は何等の變りもないのである。或る幼稚園の場合に於ては、純社會政策施設としての託兒所の場合に比して、その家庭の教育的充實が見られることもあらう。しかし、その家庭が、教育に對する自己の不足を反省し、その補充を専門施設としての幼稚園に求めてゐることは、極めて熾烈なるものがあるのである。家庭生活が必迫状態に置かれてゐる場合には、親にそうした教育意識を希願すが、それ程充分でないとしても、社會政策の見地方針から、その子を引こつて保育してやらなければならぬ。それに對して、一般幼稚園に於ては、そうしたところからの仕かけといふよりも、家庭の切實なる教育意識に對して適應せんとするものだといつてもいゝ。そこに、その家庭の求むる教育を、外的に引受けるだけでなく、內的に補導してゆくことが、當然の任務となるのである。我子を幼稚園へ託して、自家の家庭教育を放棄しないまでも肩おろしてゐる如き家庭があつたら、責めべきであり、鞭打すべきでもある。同時に、その論語切實なる教育要求に對しては、出來得る限りの手傳ひを供與し、補導に任ずべきである。

三

家庭教育の補導には、素より種々の方法があり、それ々の方面から力をつくされなければならない。しかも、幼兒を先づ保育することによつて、その家庭の教育を補導する位、適切な方法、又、具體的な方法はないであらう。殊に、一般的に普遍原則を、つまり客觀的に語る科學性の他に、その子を中心にして語る眞情の藉り方は、みんなにか大きな力をもつものかと思はれる。その人がどんな學者でも、どんないゝ話をして呉れる人でも、我子に就て深い關心を、いつしよの心配をもつてゐる下さる先生にお話していただいた方が、ぐつゝ効果の深く又こまやかなものであることは疑ふべくもない。この意味で、幼稚園の保姆先生ほぎ、母へ、しみじみとした家庭教育補導の出來る人はないといへる。家庭教育の補導は理でなく、論でなく、教へでなく、眞情から眞情への作用が中心となつてゐるものだからである。

人を信じてかゝる心

——フレーベルを読みつゝ、その解釋のため——

齋藤善太郎

「フレーベルのコツはこれぢやないかしら」を想はるゝものに行きあてゝ私なりに、何ごもいへなく敬虔な心持で其れを仰ぐこゝろにならせられてゐるこゝろであります。

其れを申しますのは、一口に云へば底知れぬほご人を信じてかゝつてゐるフレーベルのこゝろ、こゝろ、こゝろでも言ひませうか、こゝろ、こゝろ、人の本質、本體をば無限に善きもの、こゝろして見据ゑ、つかんでかゝつてゐるこゝろであります。

★

かう一口に言ひますと、何でもないこと、でもありますが、コツ／＼と「人間の教育」を讀んできて、ツインメルマンの、レクラム版の「C、兒童期における人間」の章の終のあたり、殊にその一四二頁あたりから一四四頁にかけてのあたりに來ましたとき、私は「これだナア」を實際撃たれたのであります。言葉の奥、しかも印刷されて、百年餘り後の今日、しかも私みたいな不確かな讀み方をしてゐるものにまで、その奥の方、底の方から、生きてゐるフレーベルのこゝろが、ぬく温みと動めきをもつて傳はつて來る感じがしたのであります。しかも其のこゝろは、人の本質本體を信じきつてかゝつてゐる點では、「實に、ヨクかうまでできるもの」を歎ぜざるをえざるほご、無限なる感じがしたのであります。

よく御存じの「人間の教育」の巻頭のあたり、(レクラム版にして「A、全體の基礎づけ」の章の殊に始のあたり)これも實に燦

然るして、いはゞ教育史のなかに輝く金剛石的結晶といふ感はいたしますが、しかし私としては、何かしら餘りにも麗はしき結構といふ感がして、そこを根源として一筋に流れつゞく理論も、ぎつちかさいへば形式的な感じが、まきによつてはしないでもありませんでしたが、そして其れに伴ひながら、ペスタロッチーものなきを讀むまきのやうな、はげしく迫り来る、まきこの息吹き、まきでもいふやうなものは感じさせられず、何もなくものたりなくおもはせらるゝまきもありました。しかし、こゝ、すなはち兒童期のまきを述べ終らうとするあたりに来て、「あゝ、これなんだナ、フレーベルをして、人間の教育を書かせ、また馬鹿爺さんといはれながら森のなかで子供等々飛んだり跳ねたり、させたものは」まき、フレーベルの古典的のちに探りあてたまきふ氣がしたのでした。これが彼のいのちの全部だまはいへぬであらうにしても、かくまきも其の温みに觸つたまきは云はしてもらへるやうな氣がしたのであります。

★

そのあたりまきいひますのは、原文にして一四二頁のまきところで、それまで、一生懸命に、我々は子供の本質を伸ばし出さねばならぬ、子供の内なる生を拜み出さねばならぬ、まきまきを、例によつてヤカマシク述べて来て、さて「此の年ごろの子供の本當の生活といふものは以上のやうなものである」(一三九頁下)、ではあるが、しかし實際を見るまきなかノ、斯うはゆかぬまきころか、喧嘩はする、我利々々で、氣儘勝手はする、言ふまきはきかず、實際、仕様のないやうなのが子供等の實情でもある、まき云ひながら、然しグツミ調子を變へ、しかしノ、本質まきいふものはソナナものぢやない、いや決して然ういふ様なものではない、大體然ういふ見方は根本からしてウソで、アヤマリなのである。

「大體そんな考へ方をするからして人は人にむかつて神を(眞理)と讀んでみていたゞきたい(否定することになるのである、なぜつて、そんなまきをするからして神の爲せるまきころを否定し、したがつて神を(眞理)と讀んでみて下さい、その方が分りいゝから)本當に知るための道を斷つてしまふのである、そんなまきをして(本當のものを本當には扱はず、また子供がやがて眞理になつて大きく成り出でることを妨げて、結局、ウソを、諸惡の唯一の根源なるウソを、此の世界にもたらすまきになるのである。)(一四二頁上)

まき、氣魄をもつて述べてゐるあたりからのまきころであります、まきまきを見てください、彼の言葉そのもの、まき入

ば、「人間といふものは本質上それ自身としては善くもなければ、またつまらん悪いものでもない、なき」(中途半端な言ひ方に云ふなら、そんな事を云ふ者は人間そのものに對する裏切りをなすものであり、人にむかつて反逆するものである、況して、人間といふものは本來それ自身としてつまらぬ悪いものであるなき)言ひ放たうとするやうなものがあつたら、まさにそれ以上の反逆裏切りである、(一四一頁下)といふやうな言ひ方は無論のこと、なんでもない表現の端々にまで、不用意におもはるゝ間にすら、人間の善良さ、本質的なる完全さを信じきつての彼のこゝろが、生き／＼出てをります。

★

彼によれば、いな、彼からすれば、人間は、したがつて子供は、光の子であり、本來明るく、良く、たゞ／＼、ほんこゝうであり、本來のすがたを生々々發展し出させさへすれば、そこから完く、正しく、善く、本當なるものが、子供のざんぞこから、輝き出でゝ来る光そのものゝやうに、かゞやき照り出でるのである、といふやうに、子供の、したがつて人間の本質を、はじめつから定めてかゝつてゐるのです、いな、定めていふよりか、フレーザーに三つて人間の本質はずでに／＼本來さういふものとして存立してゐるものゝやうです——さうも言ひつくしません、いはゞ光そのものゝ世界が、バァツミひろ／＼とあつて、そこから光の子が出て来る、だからその光の子としての子供はその本質になつて育てられさへすれば、内に藏する光そのものゝ法にしがたつて、それに乗托しながら、バァツミ明るい本當の光そのものに成つてゆくのである、さでもいふやうに、さにかく單純、率直に、人間の本性の善さを、もま／＼信じきつてかゝつてゐるのであります。しかもその信じきり方は、うらやましいまでに、確かで、明るくて、全幅的で、實に力強い感じがするのであります。比較はをかしいですが、あのトルストイの「イヴンの馬鹿」のイヴンの無類なる信を想はせられるのであります、理論もへチマもあるもんどぢやない、「何といつたつて事實子供は光の世界よりの子供なんだからナ」こいはんばかりの、廣い／＼の領域があつて、そこから出て来て少しばかり理論や方法を述べはするが、そして其れも相當部厚い領域をなして、いろ／＼の論理と經驗と主張とをそこに鏝めながら、信の廣い／＼領域の外廓もしくは表皮をなしてはるが、しかし彼としての眞の生命のあるところは、その底知れないやうな「信じてかゝつてゐる」單純率直な世界そのものこそ、其れであらうと思はれるのであります。

いろく／＼な本があります、ミても巧く、人を引きつけ魅するやうな、また論理整然ミ、胸のすくやうな、またボツリ／＼ミ、訥辯なやうで、ミうかするミ熟をおびて、ミても雄辯でしかも頭の下るやうな。フレーベルの「人間の教育」なんかは、この最後のものに屬するのではないでせうか。ミにかく、あまり人を引きつけ魅するものでも、巧くてホロツミさせられるものでもないミころか、斯うもクド／＼、しかも下手くそに、ゴタ／＼ミ云はなくてもよさミうなものミ、僭越ながらフトおはれさへするミころが、あるのであります。それで、何かしら奥の方に、かげの方に、ゴロ／＼ミ鳴りわたつてる精神ガイストがあつて、それが一生懸命しやべりかけ、かたりかけ、主張し、説明し、叱りつけ、願ひさげぶ、ミいふ感じが、ミうしてもするのです。その點では、私の語學の力のあやしからきてるミころもありませうが、ヘイルマンの英譯や、それにもミづくハウ原田譯の邦譯やなミは、ミてもきれいな、スラリミしたもので、原獨文の方は、私には、ミうもこんなスツミしたのではない、ミいふ感じが、よくいたします。しかし、訥々ミしてやうで、グツミ迫るもの、またミうかするミ莊嚴なるまで、たゞみあげられたる名文で、そこからは、雲間を破つてさしこんでくる光の集團がある、ミいふ感じは、ミうもさすが、フレーベルである、ミおもはせられるミころがあります、一體それがミつから來てるのであらう、ミひそかに思はせられるミころがありました。ペスタロッチーものなミです、さすがあゝいふ愛の人、熱の人、誠の人ミいふ飛び抜けてすばらしい人のものであるだけ、光に接してその輝きなり、暖かさなりの光源が、ほかならぬ太陽そのものである、ミいふミころがわかるやうに分るのですが、フレーベルの場合、ミうも私にはそれが納得いかんやうな、なぜなんだらうミいふ氣が、ミうしても残るのでした。「人間の教育」なら「人間の教育」において、述べられてゐるミころからは、時には哲學であり、しかも其れは一應は然う彼獨特のものミいふ感じのものでもなく、然う言はなければミうしても説明がつかんミいふほミのもの、やうにはミうも正直のミころおもはれず、また説明なり、そのために取り入れてる例なり經驗なりにしても、それほミバツミしたものでないやうであり、一體、何が、斯うしてコツ／＼ミ讀ましてくれるのだらう、何かしら引つ綱まへて離さぬものがあるが、それは何だらう、ミいふ氣がしました。そしてたゞ／＼此の「C、兒童期における人間」の章のほゞ終り近くに來て、そこいらはひミミほりは何でも無いミころですが、そこを貫い

てグッミ迫つて来た、もしくはチラリミそこいらで正體を見せた、そのもの、すなはち、何のこゝちはない、モウはまりこんで子供を、したがつて人間さいふものを、實は信じきつてゐる其のフレールの本心に接したとき、「ハ、ア之れだナ、正に之れだ……」ミ、ハッさいふ氣にさせられたのでした。さてさうして今まで見て来た所やその他の箇所をかながへてみますミ、如何にもミ、「人間の教育」が、讀まれる感じがしたのでした。これは、ひゞつの言ひ方にすれば、實にナンデモナイこゝがらです、きまりきつたこゝであり、まさしく今更言ふまでもないこゝではありながら、ミにかく私には、今まで見當つかずに、雲のかなたに、何かしら在つてしかも其れが生命をもつて今も呼びかけてる感じはしながら、いはゞつかまらずにゐるものであるだけに、莞爾として笑ひつゝあるフレールの顔にデカに接したやうで、何ミもいへず確かなやうな氣がしました。(こゝいらに到る、拙劣なる私の下手なアンヨふりは、實に拙いものですが、「子供の教養」の昭和十四年の十月十一月號に出してもらつてあります。)

それにつけても、フレールは、「よくもア、まで人間を信じきつたもの」ミ、自分の足もこのこゝをかながへながら、度ましい驚きに打たれます。私ミしても、人の成長を見守るわざの末席にゐるものミして、人の本質を、若しくは人の神の子性を、時にはオメデタイまでに、心に立てゝるもします。しかし、イザミなるミ、すなはち、あまり歪んだやうな性情のものにふれるミ、「これはショウが無い」、するぶんならせられてしまひます、スマンこゝですが、七度の過ちを七十倍かさねても信じて容すごころか、少しタチのよくないこゝを何遍かされるさいふミ、「コレはミても手にをへん」ミさいふ氣に、ツイならせられてしまふのです。ですから、少くミもさういはゆる「優しくある」やうにはみえないフレールが、しかし其の根、そのドン底においては、實に人を信じきつてゐる人柄であるこゝに接するミ、うらやましいまでに頭が下つて、「あゝいふやうに、ハ、マリ、コンデ、信じきれなければナア……」ミ、つくづく脚下を顧りみさせられるのであります。

★

ついでながら、しかしこのとき、彼の信はあくまでも單純、直なものであるこゝを注意しあひたいミおもひます。所によつては、彼の生活背景の中に深く溶けこんでゐるた基督教思想による言葉づかひなり考へ方なりが、煩はしいほぎに出たり、また所によつては、あらはには言つてゐるぬにしても、基督教風の神學神話を相當理解してないミ眞意にせまつては讀

めないやうにおもはるゝところも、殊に重要な部分に少からずあります。しかし何れにしても、一方には然ういふ類ひに煩はされずにフレールベルそのものに突き進み、また一方には然ういふ神學なり神話なりの知識を有つてゐる故にそちらに重點を置きすぎてフレールベルを餘りに神學的に讀みすぎぬやうに、あくまでもまづ單純率直なるフレールベルの信にデカにふれ、フレイベルによつてフレイベルを解しながらゆくことが大切なことだとおもはれます。そして、さうしてゆくことこそが、彼の深く大きい信に導かれながら、後の念願のごとく、後と共に、「すべてのものゝうちに潛み、すべてのものゝうちに生き活らき、すべてのものゝうちに支配したまふ永遠の法」のまに／＼、ものみなの「本質」「根源」たる「神」に従ひつゝ、「神」に向つて行くことゝなるのであらうと思はれます。(秋の京にて)

お寒さの候いよく御健勝に保育の途におつくし下さるご事有り難いご事であります。

この度び「幼児の母」を刊行いたしました處、かねてのお考へに幸に一致いたすことが出来まして、早速御申込みをいただき、刊行の微意をも果し得て、この上なき喜びをいたして居ります。充分お心に副はぬところも多いと思ひますが、引つゞき御利用を願つて、幼稚園の家庭教育振興にお役に立ちたいと思ひます。

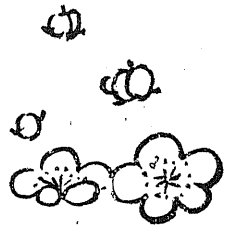
お禮ご願ひごを併せ御挨拶申し上げます。

昭和十五年一月

日本幼稚園協會

倉 橋 惣 三

尚ほ、一月號は四千程のお申込みを受けましたが、お知り合ひの幼稚園へ、更に御勧誘を願ひます。



二月の幼児童謡

葛原しげる

二月は、寒い冬の中でも、一番寒さのひさしい月です。しかし、子供は「風の子」さいはれます。その風は、寒い風の謂です。決して、夏の風や、春秋の風の事ではなくて、冬の寒い風の子ださいます。

子供 風の子——ちいばば 火の子

こは、兵庫縣印南郡東神吉地方の古の童謡ださうですが、「子供は風の子」こは、全国的に謂はれてをります。

大寒小寒

山から小僧がないて来た

なんさいつてないてきた

寒いさいつて

ないて来た

(日本童謡民謡曲集)

こは、千葉縣野田地方の古い童謡ださうですが、「大寒小寒」こは今でも、方々で聞く事であり、「大寒小寒」さいつて、

「大風小風」や「大雨小雨」ささへいひます。右のを、少しかへて、山から小僧が、「ないて来た」のでなく、「さんできた」にして、後をつづけたのに次のがあります。

—大寒小寒—

竹内武雄氏歌
河村光陽氏曲

大寒小寒で日がくれた

山から小僧がさんできた

こんく木枯冬の風

お山はさがつた銀の山

寒がり坊主のお小僧が

すべつてころんで泣きだせば

大寒小寒で月が出た

山から木の葉がさんできた

(童謡唱歌名曲全集)

これミ似て非なるものに次のがあります。鳥を出してまた木の葉を扱つてあります。そして「あれ〜」や「カアカア」ミ「ヒラ〜」なまの、こなし方が―また、第一節の「四つ五つ」に對して、第二節の「六つ七つ」の續け方が―如何にも調つてをります。

―大寒小寒―

一、大寒小寒冬の風

あれ〜鳥が四つ五つ

カア〜〜ミないてゆく

あれは塀にかへるのか

二、大寒小寒冬の風

あれ〜木の葉が六つ七つ

ヒラ〜〜ミ舞うてゆく

あれはミこまでこんでいく

「大雪小雪」でなくて、「初雪」を「小雪」にした次のがあります。「初雪小雪」ミ、同格名詞にしたのです。そして、雪に白鷺を、あしらつたのは、幼児向には何うかと思ひますが、そして、入江に、もやつてゐる船が、夕餉たく煙を上げてをり、「ちら〜雪に日は暮れかゝる」なまは、稍々童謡の本態から遠ざかりかけてゐると思ひますが、第一節

石原和三郎氏歌
田村虎藏氏曲

が活きてをります。しかし、さうも、幼児向としては、高級のものに屬して、結構な情景です。

―初雪小雪―

一、初雪小雪さん〜橋渡る

あの子はさむそ

はよ〜もごり

爐にほだくべよ

二、初雪小雪筏の上に

白鷺一つ

なにになに見てる

おまゝがゐるか

二、初雪小雪入江の船の

ままたく煙

ちら〜雪に

日は暮れかゝる

(童謡唱歌名曲全集)

雪の童謡は、古くから多い中に、富山市方面の、「ちら〜雪」は、面白いと思ひます。「大寒小寒」みたいに、小僧にしないで、猿にしてをります。そして漸進法によつて、一句一句に進展させ變化させて、後には、「いたけりや、薬つけ

鹿島鳴秋氏歌
江澤清太郎氏曲

薬つけ」を笑はせてゐます。これは「子守唄」の中にもある手法ですが、幼児には、ひびく悦ばれるものです。

— ちら／＼雪 —

雪がちら／＼降つてきた

山の猿泣いてきた

さう言うて泣いてきた

寒い言うてないて来た

寒けりやあたれ。あたりや熱いや

熱けりやさがれ。さがりや尻の皮むけるら

むけりや綿しけ、綿しきやひつつくわ

ひつつきやむしれ。むしりやいたや

いたけりや、いたやの薬つけ、薬つけ

(日本童謡民謡曲集)

(この中の「むけるら」は何の意味でせう富山方面の方に、たゞしかねてをります。)

次に、前の國語讀本中の「雪」も作曲されましたが、これは、曲の爲に作歌されたかと思はれるほど、整頓してをります。

— 雪 —

黒澤隆朝氏曲

一、降る／＼雪が ましろな雪が

あちらの山に こちらの森に

二、積る／＼雪が ましろな雪が

わらやのやねに 板屋のやねに

三、咲いた／＼花が ましろな花が

松の木の枝に 竹の葉の上に

(童謡唱歌名曲全集)

これに稍似てゐる拙作に、次のがあります。之は第一節で「降れ／＼」さいつて、第二節では、その命令(?)念願(?)が叶つて「降る／＼」なのです。それだけの事ですが、天空薄暗く、雪、しきりに降るさいふ様子が、如實に分るやうに、多少の心用意をしたものです。

— 雪 —

葛原しげる作歌

小松耕輔氏作曲

一、降れ／＼／＼／＼ さん／＼降れ

野山に降れ 庭にも降れ

ましろい雪 休まず降れ

きれいな雪 さん／＼降れ

二、降る／＼／＼ さん／＼降る

野山に降る 庭にも降る

ましろい雪 休まず降る

きれいな雪 さん／＼降る

(大正幼年唱歌第四集)

相馬御風氏歌
弘田龍太郎氏曲

更に、フランスの名曲につけたのもあります。これは原作を意譯したのですが、「雪をんな」を「雪はばア」でなくて、雪を、「白髪のおぢいさん」にたごへた事が、面白く思ひます。そして、「綿毛のやうな雪をー」を「いふころに、」霧毛の飛ぶに似たり「いふ古い句も思合はされる」です。

— 雪 —

葛原しげる歌

雪の中から

白髪のおぢいさん

笑顔をして ニコ／＼して

野山に 森に おうちの庭に

綿毛のやうな雪をふらす

(大正幼年唱歌第十一集)

雪のものとしては、昔の童謡の中に、兵庫縣東神吉地方に

雪よ ふれふれ

正月 ごさる

こいふのがあります。これは、年末の雪です、しかし冬のものたる雪をあられも又、みぞれは、二月のものでもあります—冬ですから—それには次があります、

— 冬 —

- 一、こん／＼雪降れ 風も吹け
僕等は雪の子 寒くない
- 二、ひゆう／＼風吹け 雪も降れ
僕等は 風の子 つめたくない
- 三、霞の寶玉 雪の花

子供の世界に 雪はない

第一節の「雪降れ、風もふけ」といつて、僕等は「風の子」でなく「雪の子」であることは、考へてあります。そして、第二節は、風と雪との位置を換えて「雪の子」でなく、「風の子」にしてあるのですが、幼児でなくても、紛れ易いと思ひます。「寒くない」「冷たくない」も、似すぎてゐて、覺えにくいことです。第三節の「霞の寶玉」もむづかしいですが、しかし、別の意味に於て、

「僕等は……寒くない」

「僕等は……冷たくない」

「子供の世界に……雪はない」

は、さすがに、此の作者の老手たる所以であります。

この「あられ」「みぞれ」の易しい童謡に次のがあります。これは、「バラ／＼」「サラ／＼」の擬聲の交錯から来る面白味です。一體に、幼児といはず、擬聲、擬態の表

現は、大人の世界でも端的で、適確で、動かないところに、意義も価値もあります。そして次の一篇は「毬」を雀に活かして「屋根」を、背戸を舞臺にしたのです。かうなるに、如何に似てゐても、他に紛れやうがなくて、結構です。これも此の作者の老手たる所以であります。

一 毬

野口雨情氏歌
中山晋平氏曲

- 一、毬はバラ〜 お屋根にバラ〜
雀もバラ〜 お背戸にバラ〜
二、毬はサラ〜 お屋根にサラ〜
雀もサラ〜 お背戸にサラ〜

(童謡唱歌名曲全集)

「あられ」だけのものに、私にも舊作があります。これは、「コン〜」「ミ」「バラリ〜」の擬音で活かしたものです。「お手をひろげて、あられをうけよ」は、作曲者の想なのです。まことに、毬が降り出すと、飛出して、面白がつて、手に受けまじりたく、帽子で、又、ハンカチで、落ちて来るのを拾ひ集めたくなるのです。私達、田舎の少年時代には、前掛をして遊んだ事もあつたので、よく、その前掛を開いて、毬を受けました。

又、あられが、屋根で跳ね、庭で跳ね、身軽に氣輕に列

ね廻るのを、「コンコロ踊」を見て、その題の童謡をものしたこともあります。ある観方からは、雪よりも、毬の方が、動的であり、リズムカルであり。たしかに童謡的でありますので、幼児には悦ばれさうです。そして此の曲が、極めて、印象的でありますので、お役に立つと信じます。

一 あられ

葛原しげる作歌
梁田貞氏作曲

- コン〜コン〜あられがふる
バラリ〜コン〜あられがふる
おやねにあられがふる
バラリ〜
お手をひろげてあられをうけよ
コン〜コン〜あられがふる
バラリ〜

(大正幼年唱歌第八集)

雪の遊びは、幼児にも、スキーが有り得るのですが、それよりも、「雪釣り」や「雪兎」が、もつと、幼児向であります。かなり前に次のがあります。

この第二節の「びよん〜はねる」は、無論、現實ではありません。

—ゆきうさぎ—

鹿島鳴秋氏歌
弘田龍太郎氏曲

一、赤いお盆の雪児

おめめのないのが かなしいか

長いお耳を ふるはせて

ぢつこしやがんだ いぢらしさ

二、赤い南天 おにはから

ふたアつみつて つけたらば

おめめができて うれしいか

ぴよんくはねる 雪うさぎ

(童謡名曲全集)

「雪うさぎ」が大體、室内のものであるやうに、戸外のものに「雪だるま」があります。雪だるまの面白味は、荒削りの坐像であることです。一體達磨は、坐つてゐるのですが、雪達磨も坐つてゐるのです。ヨーロッパの子供は立姿の雪人形(達磨でなく)を作り、名も Snow man といふさうですが何れにしてもその特徴は、その目、その口、また、その鼻なごを木切や、小石や、日本では、たぎんで造るゴロテスな興味です。眞白い、雪達磨が、眞黒いたぎんの目を入れて貰つたところは、如何にも、ギョロリミして、見えさうでもあるのです。そして次の日の日の出ま

で、雪の中に寒がりもせず、坐つてゐることは、幼児には不思議でもあるのです。

—雪だるま—

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

一、雪だるまが 只ひさり

坐つてぢつこ ならんでる

黒眼で ぢつこ ならんでる

たぎんの目でも 見えるのか

二、雪だるまは 元氣もの

たくさんつもつた 雪の中

ひさりで ぢつこ 雪の中

さむくはないか 雪だるま

(大正少年唱歌第二集)

二月の年ご限つたわけではありませんが、昔から火鉢や炬燵が、冬のものであるやうに、「ストーヴ」が、冬の幼稚園のものであります。かつて「腰かけ」を擬人化して幼児童謡も作りましたが、次のストーヴは、よし、理解つぽくても、一度は考へさせても見たい事柄であります。

この歌詞の中で、火の燃えるのを「トロ／＼」しましたところ、「ボウ／＼」でなくてはならぬ、ミ、いはれた若き園秀學者があつたのですが、幼稚園なごのストーヴは、静

かに、軟かにトロ／＼燃えさせてやりたいのです。「ボウ／＼」と強く燃やしたくないのです。少くとも、朝雪の降つてゐる事が分りますや、幼児の登園前に早くより、ストーヴには火を入れて、待つてゐてほしいものです。幼児の姿が見え出してから、急に、ボウ／＼焚きはじめるやうなあわて方は、禁物です。

—ストーヴ—

廊下は 寒い風が吹く

お庭は 雪がふつてます

それに おへやは温かい

さうして こんなに温かい

それはおへやの ストーヴが

トロ／＼もえて ゐますから

(大正幼年唱歌第四集)

これも二月に限つたことではありませんが、この頃、「梅」があり、「梅」といへば、「鶯」があります。しかし、昔からこの二つは、離る可からざるコンビにされてゐますが、事實は、鶯は、梅の花は咲いてゐても、同じ庭にある松の木の枝で鳴いてゐる事もあり、二月よりも、三月、三月よりも四月、ほんまに温かくなつた春、鳴くのを、よく聞くこと

もありませんが、しかし、傳統的に、「竹に雀」、「柳に燕」、そして、「梅に鶯」もよいではありませんか。

—梅に鶯—

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

梅の木の枝に 梅の花が咲いた

いくつも／＼知らぬ間に咲いた

梅の花さげば 鶯よろこび

お山の奥から うたひに出て来る

ケキヨ／＼ホーホケキヨ 鶯ホーホケキヨ

ケキヨ／＼ホーホケキヨ うれしやホーホケキヨ

(大正幼年唱歌第四集)

最後に、二月に限つたものに「紀元節」があります。日本帝國、ほこりの二月十一日です。その式歌は、その昔、高崎正風氏歌、伊澤修二氏曲、のがあります。それは「雲に簪ゆる」の名歌曲です。しかし、それは中等學校でも、四節全部を歌はないで、多く、第一節と第四節だけ歌つたりして甚だ、無意義に近い取扱ひにさへなつてゐるのです。が、それは、さうあつたにしても。

「海原なせる埴安の—」

「天つ日嗣の高御座」

なぎみ、幼児の世界のもので有り様がないのです。他の

式歌も、多く同じ程度のものでありますので、大正のはじめ、幼児唱歌の新作に志ざした時、當時の三大節の歌を新作したのです。そして紀元節のは次のです。これは、只一節だけのものですが、この他には、もう、いふべきことがないので、敢て、蛇足を添へなかつたのです。もし短かすぎれば、時に「君が代」も二唱されるやうに、これも二唱して、この意味を強調したいと望んだのでした。

— 紀元節 —

昔神武天皇が

悪ものごもを平らげて

はじめて

天子の御位に

おつきなされた めでたい日

その日は二月十一日よ

いはへやいはへ 紀元節

(大正幼年唱歌第四集)

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

保育實習科生徒募集

(官報抜萃)

本年四月入學せしむべき保育實習科生徒を募集す
其要項左の如し

昭和十五年一月

東京女子高等師範學校

一、募集人員 凡二十四名

二、出願期限 二月一日より同二十九日まで

三、學 資 學資は總て自費とし授業料年額金五十五圓を徴集す

四、選抜試験 入學志願者に對して學科試験身體検査人物考査を行ふ

1、學科試験 國語(解釋作文)、理科(動物)、圖畫

(自在畫)、音樂(唱歌)

2、期日 本年三月七日、八日の二日間

3、場所 東京女子高等師範學校

(附記) 出願の手續其他詳細の事項は之を記載せる印刷物を用意せるに付其送付を希望する者は參錢郵券を貼附し宛名を記載せる封筒を添へ本校に請求すべし

載せる封筒を添へ本校に請求すべし

古品の御照會

仙臺市

東二番丁尋常小學校附設幼稚園

古い物必ずしも尊い譯でもありませんが當園は明治十二年の創立で本年六十週年の記念を迎へました、従つて古い物で相當珍しいと思はれる品々を有して居ります。請はれるまゝに其の一部を御照會申すことに致しました。温故知新の資ともなりますことなら誠に幸甚と存じます。

額(二十遊嬉)

明治十二年頃の實寫圖で全國に現存せる唯一の原圖であります。筆者は仙臺市出身の武村耕齋女史で、全部日本繪具を使用して絹布に當時の保育の有様を實寫したものであります。畫中の人物に西郷從道氏の令息從理氏及平尾贊平氏等もをられま

す。大きさは縦八三種横五三種で當園創立者矢野成文氏が創立當時購入されたものであります。展覽會の賞狀及賞牌

明治二十三年(一八八九年)バリーに開催されました教育展覽會に當園兒の手技(縫取紙細工)を出品致しました所入賞致して賞牌と共に贈られたものであります。作品出品の方法は宮城縣を経て送りました由、又賞牌は銅製の直徑六糎半の圓板で裏面に Creche Higashi nihoncho と書き込まれてあります。

蓄音機

明治三十七年に寄贈されたもので創立者矢野成文氏令息收藏氏米國コロムビア會社に勤務中當園創立二十五週年の記念式のあるを聽き祝辭を吹き込まれて贈られたものでレコードは管狀をなしてをりました。

笏拍子

幼兒の歌に合せて打つて拍子をこつたもので當園にても古に使用したさうで仙臺市で作らせたもので木材は朴の木樫の木で作つてあります。當園には二組ございまして在庫品としてあります。

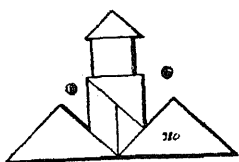
野引塗板(黒板)

當園創立當時より大正の末期迄使用したものでその數三枚あります。一枚は全面の二分の一に二寸の正方形

の野を引き又一枚は全面に一寸の正方形の野を又一枚には一寸の正三角形の野を引いてあります。その塗板の裏に「該器は文部省教育雜誌載する信三關氏所述の法に據つて製之者也干時明治十三年四月仙臺區公立木町通小學校附屬幼稚園擔任矢野成文識ス」この覺書が書いてあります。製作者は仙臺市住人丹野定治氏。

机

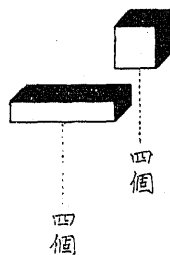
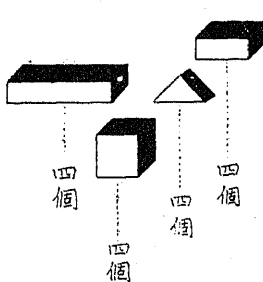
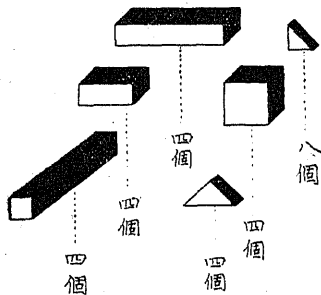
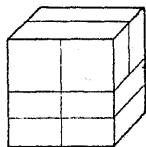
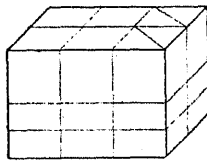
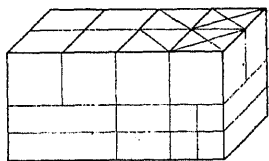
當園創立當時より大正に至る迄使用してゐましたもので明治十二年の製作にかゝるものです。幼兒二人用卓子と稱しまして全部で十六脚ございました。長さ一二〇浬幅七五浬高さ四〇浬で表面に八分方形の線條を畫して二個の抽出しが附してありましたが後年抽出しを取つて二脚合せて一個の机として使用してをりました。



恩物(第一、第二、第三)改良積木

智恵の板

當園當初に使用したもので正方形一ヶ正三角形の大二ヶ正三角形の中が一ヶ正三角形の小が二ヶ菱形一ヶよりなつてゐる圖案美麗式等己の好める形を作つて遊ぶものがあります。



書籍

幼稚園創立法 關信三識

幼稚園創立法目次

緒言

開園の原由、始祖の略傳、保育の功用、園制の傳播。

設立方法

屋宇の結構、園庭の景況、什具の排置、玩具の供給、職員
の責任。

創立費概算内譯表

幼稚園屋宇圖

保續費概算内譯表

以上日本綴の關信三氏の淨寫書であります。

此の他の古書の大體の目錄

鳩翁道話 一部九冊 文久二年版

通俗伊蘇普物話 一部六冊 明治五年官許

修身論 一部三冊 明治七年發行 渡部氏藏梓

開卷驚奇暴夜物語 一部二冊 明治八年二月發行 市川清流

母親の心得 明治八年十一月 版權免許 永峯秀樹譯

近藤鎮三譯

修身口授 全卷 明治八年 漢加斯底爾譯

警眼叢話 明治八年二月官許 中山真一譯

牙氏初學須知 一部十冊 明治八年八月發行

幼稚園記 一部十二冊 明治九年七月發行 田中耕造譯

幼稚園 一部二冊 明治九年一月發行 關信三譯

保嬰親書 一部二冊 明治九年版權免許 桑田親五譯

童蒙をしへ草 一部二冊 明治九年發行 高松凌雲譯

二十遊嬉 一部三冊 明治十二年發行 福澤諭吉譯

幼稚園初歩 一部二冊 明治十八年新彫 關信三著

博覽會見 子育の卷 全卷 飯島半十郎著

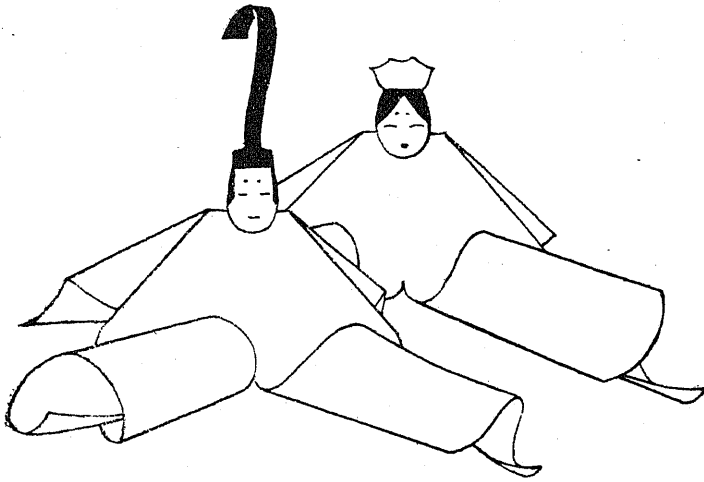
聞錄別記 一部六冊 近藤眞琴著

母の導き 一部二冊 七井光華譯

子供育草 一部二冊 村田文夫譯

慈母教草 一部四冊 長合川協輔 高田義甫 同輯

お
雛
様



及 川 ふ み

今年のお雛様は古端書で作つてみませう。そしてものさしがなくても、又下圖を作らなくても出来る簡單なものです。缺ミクレヨンミ古端書の用意があればよいのです。

先づ端書を縦に三つ折にする。その一つは切りおきます。次に残りの二つ折になつたものを今度は横に二ミ一の割の長さに二つに折る。

二の長さの長い方が前になるので、その三分の二まで真中を縦に切りはなす。その二つに切つた先の方から鉛筆なごの圓いものに巻きつけて外へまろくまき上げて、裾をつくる。後になる短いミころも半分位まで真中を切つておいて前の裾と同じ位のミころで少し曲げておく。肩のミころは二つに折つたまゝで斜に折り目をつけておいて、これを開いて出来上り圖の様に前後さも内の方へ折りこんでおく。

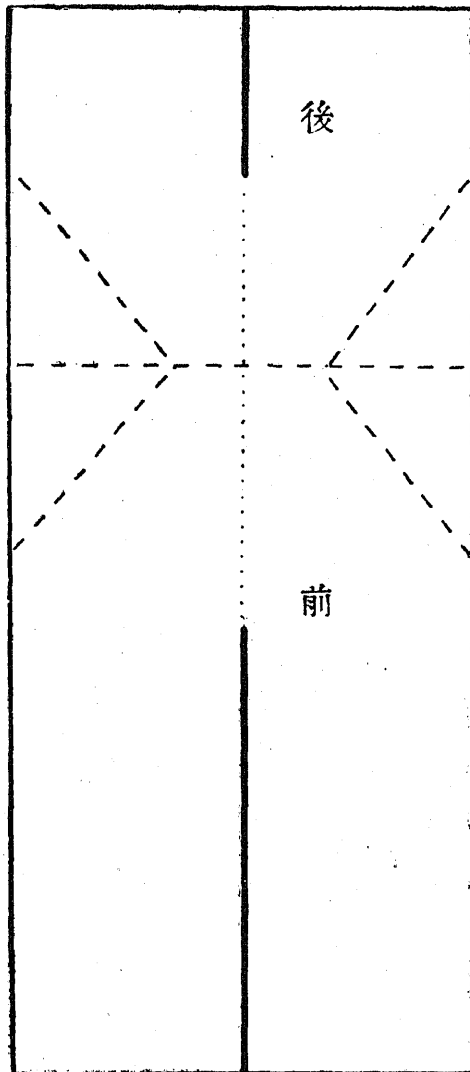
頭は肩の一番上よりも、二ミリ位下つたミころに小さい穴をあけて顔を入れこむ様にする。

顔ははじめ端書の三分の一を切りおこした部分で幼児たちに自由にかゝせてつくる事にする。

一通り形を作つた上で、クレヨンで模様をつける。親王様は茶色なきの濃い色でぬりつぶす。端書の文字も見え

前は赤黄緑の三色を一センチ幅位に順次塗るこよい。

古端書の材料が適當に數が多くない時には、畫用紙を豫め端書版に切つておいて、それに構圖をせずに幼児と一緒に説明しながら縦に三つに折り一つを切りおこし、後



ず奇麗になる。又端書の文字の薄いものや、少いものであれば組立てたおひな様の輪廓に添つて或は青や赤で半センチ位の縁ごりにするこ可愛らしい。

離臺は端書一枚をその儘で左右を前を一センチ半位の高さの箱を作つて、臺の上は縁を黄色に中は綠色に、左右

の二つを二ミリの割に二つ折にするこいふ様に目分量で作つてみる事にしたものである。

冬の満洲

満洲の冬と保育の實際

大連市譚家屯幼稚園 小山田 節

一、満洲の冬と幼児の健康問題

満洲育ちの壯丁の體位が著しく悪かつたこと云ふ憂しい事實の前に、其原因は遠く乳幼児期の健康の問題であつて、衣食住の全般に渡るご思ふのでありますが主として満洲の冬籠りの不自然な屋内生活が及して居る事實は等しく認められ、満洲の氣候風土に適應した生活をしなかつたこと云ふ事が判然として参ります。満洲土着の支那人の健康は、誠に不衛生であり且粗食でありながら強健なる體力の保持者であります。勞働者に於ては何處の國も及ばないのでせう。最近公學堂生徒(州内滿人小學生)のツベルクリン反應検査に於て胸部の異狀が殆んどなかつたこと申します。

満洲の冬の寒さが健康を害うものでなく、満洲は健康地

だごさへ専門家の方々は申されて居ります。日本人が其土地の氣候風土に適應したる生活様式に改めなければならぬこと云ふことは強く叫ばれつゝあるのであります。祖國の四季の變化眺め麗しき氣候風土の中に養はれた私共が、一度殺風景な廣漠たる満洲に移り住みて三十年餘、ようやく目ざめて來たのですが、當時冬期は二重硝子煉瓦造の家屋を北側は目張りして、其の上室内温度を七十度も昇らせ薄着した家庭人はごじ籠つて十月頃から四月頃まで暮したものが多かつたのです。日用品食料品でも求めに外出せずとも運んで呉れるし、終日外出もせず、日本より暖くて婦人は暮しよいこと云つて過したのです。冬の食物は肉食に傾き野菜が少く、甘いものが豊富に取られる等、生れ出づる

乳兒が脚氣になり腺病質となり結核の多くなるべき素質が養はれたわけです。満洲育ちの幼兒が病氣にかゝりやすく氣管枝炎、肺炎、腸炎にかゝらない幼兒が稀な位でしたのですのも當然です。南滿保養院長の遠藤博士が強く底溫生活冬籠りの解放を主唱せられ五六年の間に變つて來たのであります、一般に健康狀態がよくなつた、今や非常時局下次代國民の體位向上の爲に學校家庭社會も相協力して進みつゝあるのであります。昨年結成されました健康報國母性聯盟の如きも其實行運動の現はれでありまして、其申合せ事項の中にも廻轉窓をつけませう、胚芽米食に致しませう、甘いものを少く致しませう、子供は夜八時以後は外出させない事に致しませう、かく實行的目標を定め個々の家庭に呼びかけて居る事は誠に結構な事でありませう。小學校の講堂に冬期に備へて換氣裝置が出來つゝあります。幼稚園としては是非備へなければならぬと思ふのであります。

冬の戶外運動目覺しく盛んになつて來ました冬期になるに幼稚園の出席が少くなつたものですが近來は病氣の外餘り休まなくなつて來ました。幼い子供達もスケートや凧揚げを見る様になりつゝあります。寒さに強くなつた冬の戶外生活が實行されて來ました。特別なる日の外は天窓を開放したまゝ冬を過し得らるゝ様になつて來ました。冷下十二度の冬の日、中等學校へ通つて居ります宅の子供なき裸

體操を學校で續けて居りますが健康になつて風一つ引かないのであります。誠に今昔の感に堪へません。幼稚園兒が雪の日に戶外遊びをして雪達磨を作る事は度々あります。

二、保育の實際としての冬

一口に滿洲に申しても範圍が廣大連からハルビン迄例のアジアに乗つても廿四時間を費しますのですから、一番寒い時期は一月二月で十二月や三月は冬云ふ内には入らないと思ふ程です。其最も寒い時期の平均氣溫は冷下で大連は五六度、奉天は十二三度、新京は十五六度、ハルビンで十七八度でせう。大連でも冷下十四五度に下る日が一年に數へる程ありますが同じ氣候の日本の秋田あたりよりすつと過しやすいと思ひます。それは大陸的氣候で三寒四溫であるからであります。今年の元朝の如きは二千六百年を意義あらしめる如く大連神社頭は參拜者引きもきらず實に暖い興亞日和でした。婦人もコート無しで參道に、物賣る番人も防寒の用意もなく平氣でした。街上に子供は凧揚げが出來ました。私共の園が大連の郊外の住宅街の大佛山の山麓に在るが爲に特に多くの自然に恵まれて居る爲でもあるのですが、今年なき此暖い日の山登りが十二月に入つてきへ出來たのであります。

三月の聲がかゝるに陽氣がすつと變つて來ます。日當りのよい窓下なきでは芝生の芽ぶきを見出す事が出來ます、

子供達は青い芽を非常に喜んで探し廻ります、かくして滿洲の冬籠りはなくなつて來つゝあります。

三、冬の保育と保母の細い心構へ

何と云つても寒い事は確かな事實ですから此三寒四温を巧に擒へて保育の實際に取り入れ然して幼児の健康生活への道程には多くの注意親切なる心構へを持たなければならぬのであります。今少し個條書にして見ませう。

(一) 冬を迎へる間の大きな準備となるものは初秋より晩秋にかけて幼児の健康を増進せしめて置く事が大切なのであります。新鮮な空氣三日光ミ土に出来るだけ親しませる事であつて、許す限りの範圍に於て山登り郊外保育遠足散歩等を多く取り入れるのであります。滿洲の秋の保育は一年中最もよい時節であつて(春は非常に悪い)幼児が遊んでもくつきない保育時間なご常に延び勝ちでお歸りの時間を厭ふ位に楽しい遊びがつゞけられるのであります。

(二) 暖房の設備の注意、何時に寒さが來てもよろしいだけに準備して置く事です。スチーム温水なご危険性の多い場所は圍を準備しストーブでしたらやはりかこひの修理等々を注意して置く事です。石炭なごも豫め充分に買ひ入れて置く等の事も注意を要します。

(三) 出来るだけ寒さに堪へる習慣をつけて時期を遅く焚き始める。急に全部を暖かくせず寒い室もあつてよろしい

と思ふのです。幼児を慣らして行く注意をします。(今年なご十一月の末から本格に焚き出しました)

(四) 三寒四温をよく擒へてお空のお日様と相談して氣温に依りて調節を致します。幼児を戶外に出して外の空氣になれしむる。寒い日は外套を用ひて暖かい日は室内のまゝにて、戶外歩行や運動の時間は非常に寒ければ四五分位で暖ければ南側の陽當りでひなたぼつこやラヂオ體操もする。

(五) 室内温度の平均は六十度ですが活動力の強い幼児には六十度は暖か過ぎて汗をかきますから五十五度位から上らない方がよいと思ふ。

(六) 室内の換氣は非常に大切で保母は常に空氣の動きに注意しなければなりません。寒い日でも朝は窓を開放して空氣の交換をする、食事の前に又開けるご云ふ風に直接的に風の當らない場所の小窓や天窓を常に開けて置くか又は換氣裝置を望しいのです。

(七) 室内の湿度を保たせる爲に暖房ストーブの上に水槽等を置く事を忘れない様にします。

(八) 室内の清掃は殊に滿洲は塵埃が立ちやすいため幼児出園前、夜の内に沈んで居たほこりをはかずに布箒で靜かに拭き取る事です。晝食前又布箒をかける、是は冬中だけでなく實行致して居ります。

(九) お辨當を冷さない様に温か過ぎない程度にストーブを利用して設備して居る事は皆實行して居ると思ふのであります。冬だけでも給食を實行したいものであります。

(十) 小鳥、金魚、植木鉢、ゴム、シャボテンなど寒さに弱いものを暖い場所へ置き換へるなど保育の内容も大變關係を持つものとして大切にしたいと思つて居ります。

(十一) 一月から朝の出園時間を十時頃にして幼児の通園時を少しでも暖く室内も温めて置き午後の時間を延ばす。

(十二) 身體的に幼児の筋肉運動の自發性に満足を與へる上についての保育上の注意方法方法を考へる事をおこたらない事。活動力の強い幼児が秋から冬に入つてから運動の不足を感じる事は甚しく目立つものです。飛びたい走りたいたい力を入れたいこの自然の要求を只室内に靜かにこのみ、紙芝居やお仕事などに傾かしめる事であつて満足なるべき運動をせしめなければ、冬になるに常に思ふのです。

(十三) 寒い途中泣きそうな顔の泣きながら來るのもあります。出園児を迎へる保姆の心はやさしく心から寒かつた強かつたネ、オーバを取つてやる手をさすつて温めてやる是等一つ一つの實際は數多くあると思ひます。今日は餘り寒いから止める母の手を離れて先生に會ふ樂しみは冬の保育の上に大切な事柄の一つであります。日本の子供

は寒くはない強いよ、負けないうよ、兵隊さんは寒いでせう、是等の先生が與へる暗示も可なり強く幼児に響く。

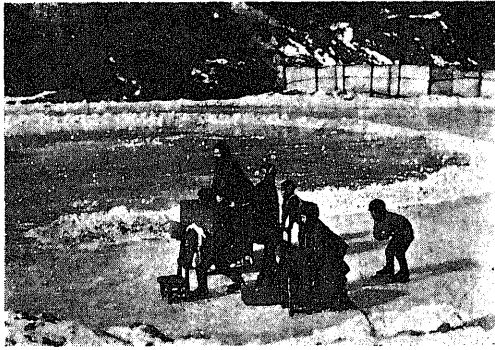
(十四) お母様も冬に入る前に御懇談の會を催して寒さに堪へる衣食の問題について話し會つて置く事も行事の一つであります。

(十五) 支那のお正月を迎へる頃が寒さの最高でせう、日支親善の對話や方法が考へられて保育の内容に取り入れられるのです。

(十六) 二月の自然が淋しい中から温室咲きのシクラメンやフリヂヤ、シネラリヤの美しき花の香をたゞよはせて室内を飾り保育をうるほはせるのも滿洲の冬の樂しみの一つです。

二千六百年の輝かしい元旦の曉ラヂオは私の魂のあるものにふれさせて呉れました。それは聖地旅順に御造營中の關東神宮奉仕の槌の音に其祈りでありました。嚴かな心に返り興亞の一角に強く立ち祖國の爲に奉仕させて頂く私共の責任を感慨深く銘したのであります。永しへに日本精神の礎は築かれて行く喜びを思ひつゝ稿を終ります。

園庭寸描



押、スケート遊びに戯れます。子供に想像出来ないと思ひます。上手です。スケート場の使用出来ない場合には、町を八分間位歩いて北風に晒されま

おや！水が出ない、水道が氷つてしまつた。こゝから本格的満洲の冬が幼稚園にまでさばつて來ます。さあ大變!!北側の二重窓は全部目ばりを、花瓶、金魚鉢等は水をあけて代りに石炭箱をひつぱり出す。ペチカの煙突掃除。

まつてるた川も氷りました。幼児はこゝで毎日平均四十分、ソリ

滿洲國鷄冠山幼稚園 日 高 テ イ

す。何しろ幼稚園は小學校の附屬ですので、何でも小學校が心配して下さいます。例へば、衛生方面のこゝでも、學校衛生婦が見るやうに決まつてます。含嗽の水、肝油、洗眼、溫度、ラキサトルの飲用、スケート場の準備、遠足(冬には耐寒遠足)、式の場合(小學校にて)掃除責任(ボーイング)等も。

お部屋での遊びは、内地と同じで時間をきめた換藥を必ず致します。

幼児は寒くて風邪をひくこゝはなく、汗を出して風邪をひきますので、あつ過ぎず、乾燥しすぎない様、常に濕、溫度に意を配ります。

かくして健やかに伸びゆく幼児、遠く祖國を離れ、母國を知らずに育つ子供達に、紀元二千六百年を迎へまして、私達はいつでも日の丸のまごにあるんだといふこゝを精神的に強く植ゑつけさせ、滿洲を背負ふ第二の國民として恥づかしからぬ心の持主にまご心構へてゐます。

童話・岸邊福叟名話集

倉 橋 惣 三

「鹽賣り仁吉」を始めて聞いた時の感嘆は今でも覚えてゐる。場所はどこであつたか——神田の青年會館ではなかつたかと思ふが、はつきりしない。——なんでも午後であつた。その夜、わたしはひさりで其の節々を真似してみたりしたものであつた。「鹽、しほッ、しほやァイ……」のさころなき、自分の真似を、今でもそのまま真似をして見られるやうな氣がする位だ。この話は、この本で見るに明治四十年頃の作と書いてあるから、わたしは聞いたのは、初演でないにしても、その年か、離れても一二年後を出でない時のことであつたに相違ない。その頃は、此の著者のみならず、巖谷さんや久留島さんのお嘶を、いろんなさころへ出かけて行つては聞いたもので、若いわたしも、今から思ふに感心であつたが、當時のお嘶運動そのものが、今から見るに最も新鮮な刺激性を以て同好をひきつけたのであらう。岸邊さんは、その頃から驚くべき凝りを以て、わたし

達の耳を聳たしめたもので、「鹽、しほッ、しほやァイ……」も、その代表の一つだつたのである。著者の「お伽嘶の仕方」の理論と實際が出たのも、その頃だつた。當時の若い嘶し方研究者が、みんなに熱心に、この創意に富める新著を讀んだことか。——新刊の名話集を贈られ、殊に巻末に添えてある舊著の挿繪を見て、わたしの思ひ出は、ついさんだ古い昔に飛んだ。

○ この間何十年か相立ち申候。

題して福叟名話集としてあるのだから、岸邊翁といはなければなるまい。しかも、いつまで若い翁なのであらう。あの若い日の凝りを少しも弛めないものである。三百餘の創作の中から自選二十一といふことが、既に仇おろそかな態度ではない。「子孫のために書き遺す」といふ題言と共に、先づ以て深き敬意にたえざらしめる。

て、この書は確かに胸を開かせるものである。

次に、この好著の紹介者として、讀者の爲に是非言ひ添えて置きたいところが二つある。その一つは、この各篇を讀むのに、是非、ゆつくり讀まれたいといふことである。ゆつくりといふのは、必ずしも時間的にいふだけのことではない。一字一語を音として丹念に辿るのは勿論、句の切り方、行のかへ方に注意して、呼吸の動きを以て讀むことである。著者は、この書の中で、お話を書いてゐるのではなく、晰してゐるのである。従つて、讀者も、目に讀み、頭で解釋し、筋や意味を理解するだけでは足りない。そこに晰されてゐるまゝを、晰し手のいきづかひと共に受け取らなければならぬ。この本は、お話のたね本ではない。晰方そのものを以て讀むべきものである。唄の本、謠ひ本に譬へて正しいかぎうか知らぬが、少なくとも、飛び讀みで筋だけ追つたり、棒讀みで意味だけ捉へようとしても、この書の眞の味は出ない。——この點に於て、讀者はこの特色ある童話書から、文學としての童話を與へられる以上に、口演藝術としての童話に就て、こまかく學ばせられるところがあるであらう。世に讀む童話の標本は少なくない。晰す童話の範例となるものは比較的少ない。この書は、その最も徹底的なるものである。

作は、明治二十七年頃創作の「足柄山の金太郎」から、最近昭和十四年二月作の「國を護つた傷兵まもれ」に至るまで、翁の童話生涯の今日までの各時代をちりばめてゐる珠玉篇のみである。殊にその中に、宮城呉竹寮に於ける光榮の謹話「柿」「良寛和尚」「鹽賣り仁吉」の三篇のあることは、いやましに此の書を、而して、童話人として翁を飾るものである。

わたしは、此の諸作を、批評家の立場で見ると、著者さ餘りに懇親である。全巻を精讀しての感じとしては、是等の自信作を此の美しい本にまごめられたことを、著者のために、以て斯道のために、心からする喜びが第一である。しかも、それと同時にわたしの感じの底に浮んでゐるものを摘みあげて見るに、相變らずの凝り方だなあ。それにしては何んかいふう、まさであらう。さういふ感じである。更にその後ろにある感じは、心にくい程だなあ。しかし、斯の道に對する之れ程の潛心には、うまさ、に對する感服よりも、態度に對する敬服を禁じ得ないといふ感じである。こんなことを書いてゐるに、そんなことを、今頃知るのかさういひそうな著者の顔も見えて來るが、藝術家はその作技に於てその一番の本氣を立證するのが常である。——近來、子ぎものためを稱して、餘りにも非良心的な、失敬なものゝ多いのに聊か憤りを抱かされてもゐるわれ〜こし

その二は、この書からお話の作り方のいろ／＼の場合を考へられたいこまである。二十一篇の中には、年齢に於て、それ／＼異つた話がある以外に、たゞへば、「旭トクジラ」「南洋のかに」「お日様のぼる」「スキスノユキナゲ」のやうな、實際の景物に題するものもある。「でんでん蟲」は西條八十氏の詩を、「青い鴨 月をあびるよ」は北原白秋氏の詩を、共に詩からの轉作さいふよりも、美しい詩をさうして幼き者へ語らうかの苦心に基く新しい試みである。フランダースの犬を原話させる「少年畫家 清」では、外國の話を雛案のし方に就て、「國を守つた傷兵 守れ」では、標語の活きた與へ方としての、最も心の籠つた童話化に就て、その他、「かぐや姫」「因幡の白兔」「足柄山の金太郎」に於ける昔からのお伽噺の扱ひ方に就ても、「三羽の白鳥」に於ける昔からのお伽噺の扱ひ方に就ても、「三羽の白鳥」に於ける昔からのお伽噺の扱ひ方に就ても、「三羽の白鳥」に於ける昔からのお伽噺の扱ひ方に就ても、「三羽の白鳥」に於ける昔からのお伽噺の扱ひ方に就ても、著者は並々ならぬ苦心の結果を教へてゐる。勿論如何なる童話作家も、作家良心に於て苦心しないものはないが、此の著者は、單に新しい話を作り、舊い話を書きかへるさいふだけでなく、それを自分の噺にするために、即ち、最も厳格な意味で自分のものとするために苦心してゐる。そこに、讀者も亦、意を注いで讀まなければならぬ。噺は人の噺をたゞ口にくつすだけのこまでではない。充分自分のものになければ、噺し得るものではないのであ

る。話をさう噺そうかであるよりも、その話を、さういふ風に自分の噺にしようかである。しかも、之れは噺し方の上に於ける苦心であるに止まらず、苟も、自分の話をつくる時の苦心でなければならぬ。その苦心が此の書から學ばれる。

○ 文學としてのお話にも、いろ／＼の傾向がある。噺し方に至つては一層いろ／＼の型もあらう。斯道の三大家せられるもの著者の他に、巖谷氏、久留島氏を比較して見ても、それ／＼流派別のやうなものを感じさせられる。そのいづれを好むか好まないかは、各人の自由に任す外はない。又、各人はそれ／＼自分の噺方を工夫すべきで、敢て先人の模倣を事すべきではない。しかし、先人には、その天分を研鑽に於て、執つて學ぶべきあると共に、後生の苦心努力の足らざるを激勵鞭打するものが少なくない。すなはち、さきと同じ書肆から刊行せられた「童話・巖谷小波名話集」、「童話・久留島武彦名話集」を併せて、此の書を、心から歓迎推薦するものである。そして、是等我國童話界の所謂三大元老との親しい交誼を、更めて深きよろこびとする。

(東京神田、東洋圖書株式會社發兌)
定價金貳圓八拾錢、送料金拾六錢

お話遊び二つ

徳久智江子

氣候のよい頃に比較して、さうしても室内での遊びの多い此の頃、お話遊び等も又子供に喜ばれる事で御座います。

簡単な物であれば、始め少し先生が指導して下さいれば、後は子供同志で或は豚になつたりお婆さんになつたりして、幾日もく面白相に繰返して居ります。

それに用ひる色々のセットを皆で作るのも又一つの楽しみで、下手でも幼児の手で全部作りたいと思ひます。

私共の園で致しました中で、子供の喜びました物を左に二つ記してみました。歌詞も曲も全部自作で御座いますから、作曲上から見ると誤りの點もあるのではないかと存じます。適當に御訂正下さいます様お願ひ致します。

其の一 三匹の小豚

登場人物

赤い豚

赤いチョッキでも着て頭に正面向の豚のお面をつける。

白い豚

同様にして白いチョッキを着る。

黒い豚

同 黒いチョッキ。

準備

藁の家

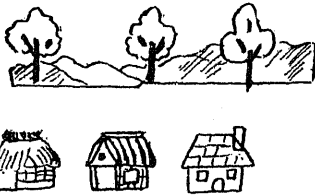
ボール紙に藁の家を書き幼児の椅子の片面につける。

木の家

木の家と同様ボール紙に書いて、椅子につける。

煉瓦の家

背景の山と木、ボール紙で作る裏から材木をつけて立つ様にする。



唱

赤い子豚 白い子豚

黒い子豚が三匹で

お家を建て様と考へた

一回前奏の間に三匹の豚は肩を組んで下手から出て来て正面に並び、そして次の歌の間は手を組んで首を左右にかしげ考へてゐる形

をして居る。

白「みんなでお家を立て様」

赤「ウン、作らう」

黒「何で作るの」

赤「僕は藁で作らう」

白「僕は木がいゝや」

黒「僕はれんがで作らう」

一同「さあはじめ様」

三匹はそれ／＼の家の所に行つて、トン／＼／＼たゞく椅子をしながら段々に椅子をまわして晝の付いた方を向ける。(歌に合せて)その間に唱の人は左の歌を唱ふ。

唱 赤い子豚は藁の家

白い子豚は木のお家

黒い子豚は赤煉瓦

白豚「やあ お家が出来た」

赤豚「もう 雨が降つてもぬれないね」

黒豚「そうだよ 嬉しいなあ」

家が出来上ると狼がマーチに合せてノツソリ／＼出て来る。

唱 お山の／＼狼がのつそり／＼お散歩だ

豚「やあ 狼が来た／＼」

いそいで皆家の中にかくれる。

狼「おや／＼子豚がお家をたてたな、よし一ついちめてやらう」

藁のお家に行つて、

狼「トン／＼／＼子豚ちやん 僕も入れて」

豚「いや 狼さん又いちめるからいや」

狼「よし そんな事いふなら、こんな家吹き飛ばしてやるから」

豚「いやだよ／＼」

狼はフウ／＼吹きながら椅子の家をひつくり返し逃げる豚をつかまへて、

狼「どれ／＼家へ置いて来やう」

と下手につれて行く。そして又木の家の所に行く、

狼「トン／＼／＼子豚ちやん こゝ開けて」

豚「いや、狼さんいちめるからいや」

狼「ようし、そんないちわるいふなら、こんな家吹き飛ばしちやん

ふから」

豚「いやだよ／＼」

狼は又フウ／＼吹きながら家を引つくり返して豚をつかまへて

て

狼「よし／＼もう一匹つかまへたぞ」

と下手につれて行く。今度は煉瓦の家に行く、

狼「トン／＼／＼子豚ちやんこゝ開けて」

豚「狼さん いちわるするからいや」

狼「ようし そんな事いふなら、こんな家吹き飛ばしちやん

豚「いゝよ 吹き飛ばせるなら、飛ばして御らん」

狼「ようし フーツ」

と吹きながら椅子をかた／＼させるが倒れないので一廻り周囲を廻つて来て、又、フウ／＼と吹く。

三匹の小豚

一のうた

ア カ イ コ ブ タ シ ロ イ コ ブ タ
ク ロ イ コ ブ タ ガ サ ン ビ キ テー
オ ウ チ フ タ テ ヨ ト カ ン ガ ヘ タ

二のうた

ア カ イ コ ブ タ ハ ワ ラ ノ ウ チ
シ ロ イ コ ブ タ ハ キ ノ オ チ ナ
ク ロ イ コ ブ タ ハ ア カ レ ン カ

終りのうた

ア カ イ コ ブ タ シ ロ イ コ ブ タ
ク ロ イ コ ブ タ ト オ ホ カ ミ ト
キ レ イ ナ オ テ ン キ ウ レ シ イ ヒ
ミ ン ナ ナ カ ヨ ラ ナ リ マ シ タ

狼「あれツなか〜飛ばないぞ」
又廻つては吹く、又廻つて来ては吹く。
豚「狼さん、これは煉瓦の家だから飛ばないよ、もう降参したでせう」

狼「あゝもうへと〜だ こうさんしたよ」
豚「ちや、僕のお兄さんを返してよ」
狼「ウン、返してあげ様ね、今連れて来るからまつて〜ね」
と下手に行つて二匹の豚を連れて来る。

黒豚「あゝ兄ちやん達が歸つて来た〜」
と喜んではねて居る。
狼「御めんね、もういちわるしないからこめんね」
豚「ウン、これからは皆で仲よく遊ぼうね」
狼「あゝ遊ぼう」
唱、赤い子豚、白い子豚
黒い子豚と狼と
きれいなお天氣 嬉しい日
皆仲よくなりました
一同仲よく並んで唱つて
終となる。

其二 お菓子の家

登場人物

子供 二人

きのこ 三人

お花 三人

小鳥 三人

お婆さん

唱歌隊 大勢

準備

お菓子の家、有り合せの衝立でも利用して片面だけの家を作る。ビスケット飴棒等を子供に書かせて切り抜いて貼る。

屋根は茶ホールに板チョコを書いたものをつける。ドアを一つ作る。

木 三本

きのこ 大小合せて五六本

草

どれも大きい積木にでもつけて立つ様にして置く。

赤い花一本 クレープペーパーで作る。

きのこの子供

運動帽の様な帽子を黄色い布で作る、

赤い玉を適當にはつて頭にかぶる。

お花の子供

クレープペーパーで大きい花を作り頭の上につける。



小鳥の子供

きのこの子供と同様な帽子を濃い茶の布で作り、目と嘴をつけてかぶる。

お婆さん

ホール紙で大きな鍵を作り、首から掛けて、適當に曲りのついた木の枝を杖にする。帽子はどちらでもよい。

子供二人 普通の服装



幕が開く前に、きのこの人は葎の

蔭に、小鳥は木の蔭にお花は草の蔭にかくれて居る。

お婆さんは家の中に、子供は家と反対側の舞臺の裏で待つ。

開幕

軽い音楽につれて、小鳥、花、きのこがそれらの場所から出て来る。(リズムに合せて)そして唱歌に合せて圓くなつて躍る。

お山の〜そのおくに、…手をつないで軽い足で左にまはる。

お菓子のお家がありました。…同様にして右へまはる。

お婆さんは…両手を頭上にかけて三角の屋根の形を作り、板チョコ…其の手を左右に開き横に伸す。

お婆さんは…両手を頭上にかけて三角の屋根の形を作り、板チョコ…其の手を左右に開き横に伸す。

柱は鉛入棒……両手を真直ぐ上に立てたまゝ自分の周囲を一廻り。

壁はカステラ……右足を上げ一つ飛ぶと同時に拍手一回。同様左足をあげて拍手一回。

ビスケット……繰返し。
不思議なお家が……手をつなぎ中に入り、「お家が」で元の位置に戻り。

ありました。……拍手
又軽い音楽で元の場所にかくれる。

子供達二人手をつなぎ、「お手々つないで」の唱を唱ひながら舞臺に出て来る。

男「あゝくたびれた」
女「おなかへこ〜よ」

男「僕もだよ。オヤツ何だかいゝ匂がするよ」
女「本當だ、おいしい相な匂ね」

二人でそこいらを探す、
女「あッこゝにお菓子のお家があるわ」
二人かけよる。

男「おいしいそうだな」
女「これ カステラよ」

男「どれ〜（食べるまね）あゝおいしい」
女「これ チョコレートだわ（食べる）あゝおいしい」

男（食べるまねをしながら）「あゝおいしい」

女（食べるまねをしながら）「あゝおいしい」
夢中で食へて居る。

はつきりした音楽に合せて家の中からお婆さんが出て来る。
一度舞臺の中央まで来てから、子供達を見付けて、子供のそばに行く。

婆「これ〜（少し大きく）これ〜」
これは私の家だよ、子供驚いて飛びのく。

男「あッこれお婆さんのお家」
女「ごめんさい、おなか、へこ〜だったから、食べちやつたの」

婆「あゝよし〜中にもつとおいしい御馳走があるから、おはいり」

男「本當、うれしいな」
じや行かうよ」

女「えゝ行きませう」
お婆さんに連れられて二人中に入る。

直にお婆さん出て来て、大きな鍵でガチャ〜と鍵をかける真似をする。

又前のマーチで舞臺の中央に来て、
婆「やれ〜これはいゝ鹽梅だ、その間に一寸買物に行つて来やう」と下手には入る。軽いマーチに合せて小鳥、きのこ、花が出て来る。一列に並んで唱ふ。

唱
さあ大變
さうし様

お菓子のお家は

こわい家

もうどうしても出られない

次に言葉で

A「こまつたな」

B「どうし様」

C「かわいそうだね」

D「ひつばつて見様か」

一同「うん、ひつばつて見様」

小鳥やきのご達ドアの方を向いて「こーとろく」の様につながつて、「ヨイショヨ〜」と引く真似をする。この間に唱歌隊

の一人獨唱

困つたなあ〜

押しても引いても 知らん顔

魔法のドアは知らん顔

きのご等は引くのをやめて一同腕組をして首を曲げて考へて

居る。其の中に小鳥の一人急に思ひ付いた様に、

小鳥「ねえ、いゝ事 思ひ出したよ」

馳けて赤い花を取つて来る。

小鳥「この赤いお花で、三邊たたくと開くんだった」

一同「本當、じややつて見様」

小鳥の一人赤い花でドアをたたく

小鳥「一つ(とたたく)

一同「ト〜ン(と強く足ぶみ)

小鳥「二つ(とたたく)

一同「トン」前に同じ

小鳥「三つ」前に同じ

一同「トン」

急に愉快なマーチ、ドアが開いて子供が飛び出しスキップで小鳥達のまはりをははる。小鳥やきのは喜んで手をたたくながら其の場所で飛ぶ。喜びの様子。

男女「どうも有りがたう」

小鳥達「よかつたね」

子供と小鳥達一緒に自由な方向に遊戯をする。

赤いお花で……花でドアをたたく形、

トン〜……右足で強く床を三回打つ、

ドアは開いたよ……自由方向に喜びの表現を、

不思議だな してスキップ

ドアは開いたよ……スキップで飛びながら嬉しいな

列に並ぶ

全員で今一回此の歌を唱つて暮となる。

お菓子の家

始めの唱



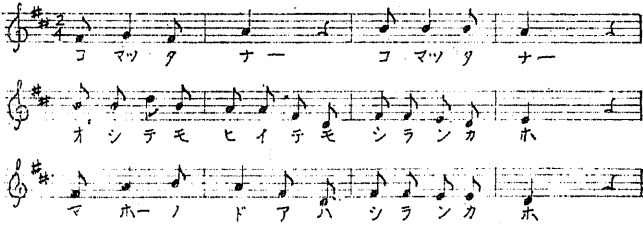
オヤマノ オヤマノ ソノ オク ニ
シカシノ オウチガ アリマシタ
オヤネハ イタ知コ ハシラハ アメンボ
カベハ カステラ チヨコイトー
シシギナ オウチガ アリマシタ

きのこ達の歌



ナイ アン ドウシヨウ
オカシノ オウチハ コワイウチ
モウ アシテモ デラレナイ

獨唱



コマツタ ナー コマツタ ナー
オシテモ ヒイテモ シランカホ
マホーノ ドアハ シランカホ

最後の歌



アカイ オハナデ トン トン
ドアハ シイタヨ フシギタ ナー
ドアハ シイタヨ ウレシイ チー

困つてゐること、困つてゐる子

麴町區番町幼稚園

岩 本 三 よ

又お正月が参りました。一つづゝ年をこつた三十九人の
ごの子もくゞめつきり大きくなつたようです。

自分もこの年位の頃のお正月がきんなに嬉しかつたかを
思ひ、この子達も嬉しさの餘り身も心も一時に成長したの
であらうと抱きしめ度いような愛情を一人くゞに感じて居
ります。

今朝も幼稚園に来て見ましたら、人少なで静かなお部屋
の一隅の日溜に小テーブルを出して、男の子が四人、繪合
せをして居りました、頭をつき合せた四人の姿が日の光に
包まれて浮び上つた光景は、冷い風に冷え切つた私をすつ
かり暖めて呉れました。

この四人は四人共、今迄一度もお部屋の中なきで遊んだ
事のない元氣者達です。寒い時には教へなくてもそれに應
じた生活をして居る子供達が何故かたまらなくいさしいも
のに思はれたのです。

十人の三年保育の小さい子供達もこの頃すつかり大きく

なりました。けれど混合組を持つて見て、この頃の二年の差
さいふものは随分大きなものだといくゞ感じて居りま
す。

先達も或機會に混合組の悩みを倉橋先生にきいて頂き色
々お教へ頂きましたので、今日はその御報告を致しませ
う。悩みを言つても色々ありますが、その中の大きい問題
を二つ伺ひました。

A. 智育方面

年齢二年の相違による發達程度の差は、製作なきのよう
な個人的にするものにはさ程でもありませんが、多く一
齊の方法を取る唱歌遊戯談話なきの場合、問題になつて
來ます。

例へば唱歌遊戯の場合、年少兒の興味の特續時間は永く
て十分ですが年長兒は十五分から方法によつては三十分
位迄、續ける事が出來ます。又談話の場合には、理解の程
度も違ひますし、皆に向つて話されて居る事には未だ注
意を集注する事が出來ないので、人手のある場合には
年長、年少分けてする事もありますが、出來るなら成可
くは一緒にしたいと思ふ理由も種々あるのです。

そこで年少兒を年長兒まで引き上げて、一定の時間引き
つけておくように訓練するさいふ事が考へられます。

が之は年少兒にこつては、餘りに不自然な事であると思

ふのです。

然し年少の程度を標準にすれば、年長児は常に不満です。此の兩者の差をこのように解決したらよいのか、悩み續けて來ました。

倉橋先生は次のようにお教へ下さいました。

常識的ではあるがこの場合には兩者の間をさる。即ち年長児にまつては程度を下げる事になる。年長児は力を出し切れず、不満である事はまぬかれないが、より高いものに就かしめる不自然よりむしろ之を選ぶ可きである。

智育方面ではこの組の年長児は單一組の同年の子供より多少遅れるかも知れないが、他の方面で補つて餘りあるのだからこの邊に解決點を置いたらよい。談話の場合なごにはきちんききく事を要求しなくても良い、吾々はごもするさきちんききく事を要求しなくても良い、吾々はご不識のうちに要求してゐるごがあるが、子供は自由な恰好をしてゐて、手いぢりなきをしながら、それでゐてごでもよく聞いてゐるものであるから、必ずしも形の整ふごを要求しなくともよいし、又一人残らず聞いてもらふごいふごも六ヶしいごである。ご仰言られましたごが、本當にさうした事を要求する自分の神経質さは全く愚な利己主義だつたご熱々思ひました。

B、訓育方面

年少兒に大變亂暴な子が居ります、大きい人達に向つて理由もなしに亂暴するのですが、年長兒達は例外なしにその子を許して了ふのです（かくあれご教へた事は一度もないのに此の大きい子達の傾向は他の年少兒達に對しても同様）。この年長兒達の寛大さは小さい子にまつてぎれ程の不幸であるかご私は何時も思ふのです、相手に加減されてゐる年少兒達の生活は本當のものではない、自分の力を過大視して空威張りする悲しい姿です。この子は自分の亂暴に對して制裁がないので益々増長して行きます。叱るごいふ事が必要ごなりませんが、家庭に於て叱られつてゐる子は殆ど叱りに對して不感症でもあるのです。叱られた時には涙を出しても、直に忘れて了ふごいふ状態。この場合私はごんな態度をさるべきか罰らなくりました。

「その大きい子のは、寛大ごいふものか、手をつけられないで、さうさせて置くだけかも知れませんね。それにしても、小さい子には爲にならぬごですから、先生が變つて抑えるのですね。大きい子にも、しつかりやつて貰ひますか。但し小さい子は少々異常なものでないでせうか。それなら大に矯正する必要があるごませう。」結局、この子が對當のお友達を得る四ヶ月後まで待つ事になりました。こうして、解決して頂いて、益々勉強の必要を痛感

して居ります。

混合組と言へばこんなに惱み許りと思召しますかしら。小さい子がお兄さん達に本を讀んで貰つて居る光景なき寫眞にしてお送りしたい位。此の頃、オーヴァーは一人で着ませうと申して置きましたら、小さい子達は、着られない時は私が居りましたが、必ずお姉さん達に着せて貰つて居ります。廿八乍らいたわり乍ら着せて上げたり、着せて貰つたりしてゐる様子を一人で嬉しさうに見て居る私を御想像下さい。そんな譯でこのお部屋も家のような氣がするのでせうか、毎日誰か彼かに無心にお母さんと呼びかけられます……年長兒の就學期が近づきました。訓練の問題も此の頃漸々一筋の道が見へて來たようでございます。では折々の御鞭撻を待ちつゝ今日は之にて。

(二月九日)

室内遊び……

附屬幼稚園

町田 行子

戶外遊びの一番好きなきこも達も、寒い冬になるに多きの時間を室内で過ぎなくてはならない。室外が相當に暖か

くなるおひる近くまでの何時間かは、仕方なしに室内にさぢこめられてしまふ。さなるに、戶外で力一ぱい自由で遊んでゐた元氣さのあふれくるのを、さうしたらよいであらう。お遊戯室で度々リレーもし、軍隊式行進もする。鬼ごつともすれば、室内特有の樂しさもあるかくれんぼもする。しかしこれ等は戶外での遊びが、そのまゝ室内でも出來るさいふのであるが、そればかりでなく、かへつてさういふ時を利用していろくくの面白い遊びなきもあらう。さうして室内での生活も亦樂しませたい。この頃にお部屋でよくするあそびを少し擧げてみるこ、

○まりかくし、鬼を一人お廊下に出しておき、その間に誰かのエプロンの下にまりをかくし、鬼をよび入れまりをみつさせせる遊びである。鬼が室内に入つてくるに同時にピアノを小さな音で弾き始める。鬼の歩くにつれ、まりのかくし場所に近づいて行く時には音をだんくく大きくし、まりから遠ざかつて行く時には音を小さくして行く。鬼は音の強弱だけを頼りにまりを探さなければならぬ。案外に「音」に無頓着なきもの多きこである。「音」にお構ひなしに歩きまはり、いゝ加減なあて方をする。よく耳をすまし、注意深く歩くきこもがちきに探してゐる事が出来る。これはなれるまでは割合に難しい遊びかも知れない。はじめは机を

きけて一列圓形に腰かけてゐてもよいが、少しなれてくるミそれではやさしすぎて呆氣ない位になる。

かへつてふだんの通りいくつかのグループに分れてお机の席についてゐる方が面白い様である。鬼であつたこどもはみつけたまりを、次の時に誰かのエプロンの下にかくさせる特權をもつてゐる。まりをかくしてゐたこどもは、次には鬼になるのである。

○椅子ざり、こども達が一番好きな室内遊びはこれである。雨の日には、よくみんなの希望ではじめられる。

しかしこれは机を一ミ所に集め、そのまはりに椅子を外向きにおくさか、机をさけて椅子をまるくおいてするので、準備ミしてもお部屋全體を動かさし、その上皆が歩きまはるのであるから、午後が都合がよいさいふ事になる。椅子ざりの行進に使ふ曲は、皆がよく知つてゐる元氣にうたへる歌がよい。歌の調子ミ歩調ミが一致するものでなければならぬ。その點軍歌なきよく合ふやうである。それミも、歌はない行進曲の方がよいのであらうか。お辨當の後片附もさう／＼に椅子ざりを始め、いつもおかへりまで夢中でつゞけるのであるが、おかへりの時間がせまつてしまつた時には途中でやめるさいふ事もいやなので、お椅子に腰かけられなくなる人を一度に二人、三人ミぶやしてする。之

も亦面白いものである。そして一人か二人残るまで、終りまでするこみにしてゐる。

○しりざり、机を一ミ所に集めてそのまはりに皆が腰かけられる様にする。おさなりへおさなりへミ順々に云はせる。あげられた名は黒板にかき並べて行き、前に出た名はよける事にする。

○「ア(イ、ウ……)」の字のつくもの、しりざりミ同様に順々に言はせるのであるが、答へられないこどもが割合に多いのである。順番に云はせた上、更に知つてゐるだけ云はせ、尙あれば先生があげていふ。又はいくらかの暗示を與へてあてさせる。(しりざりの時も同様)

○「何」で出來てゐるもの、例へば「木で出來てゐるもの」の名をあげさせるのである。先づ最初は「このお部屋の中にゐるもの」ミ限定して、實物を見て答へられる様にする。次には「お家にあるもの」ミ少し範圍をひろげ、終にはたゞ「木で出來てゐるもの」ミさいふ事にする。

○大きい提灯小さい提灯、一人の鬼が「大きい提灯さいふミすぐに皆は手で小さい形をつくり、鬼の命令さいふもあべこべの大きさを手で作つて示すのである。間違へる人がなければさん／＼つゞけて早くいふ。間違つたこどものひざりを次の鬼に指定してさせる。

○一、二、三、四、五、六、七、八、おさなりへミ順に八

までの數を送つて行くのであるが、その中「四」の時には口では云はないで頭の上(顎の下)に手をのせ、「八」の時にはやはり黙つたまゝ拍手する。なれ、ば、途中でこちらの方向へ送つてもよい事にする。右か左へ顔を向けて云ひ送る。「四」の時には手ぎ顔の向きによる。これは相當に大きなこゝもでなければ出来ないこゝであらう。

○その他 マットなき持ち込み土俵をつくり、豆行司、豆相模の賑やかな國技館を開く事もある。又さくら、花一モンメ、お芝居、つこなぎ、いろくさ室内遊びも楽しいこゝである。

第七回全國幼稚園關係者大會收支決算報告

仙臺市保育會

收 入

一 金貳千壹百七拾圓四拾七錢也 收入決算高

内 譯

金貳百五拾參圓 仙臺市保育會加盟各幼稚園支出金

金八百貳拾圓 大會出席者會費

金壹百圓 補助金

金七百八拾九圓五拾錢 寄附金

東京フレイベル館社長貳百圓

市内幼稚園募集額

五百八拾九圓五拾錢

金貳百四圓五拾錢 會員松島巖釜見學旅費

金參圓四拾七錢 預金利息

支 出

一 金貳千壹百七拾圓四拾七錢也 支出決算高

内 譯

金壹百四拾四圓四拾錢 印刷費

金壹百五圓九拾四錢 通信運搬費

金四拾貳圓四拾七錢 會場費

金壹千壹百參拾五圓七錢 接待費

金貳百九拾參圓四錢 雜費

金參百九拾參圓九拾五錢 松島巖釜見學費

金五拾五圓五拾錢 鐵道辨納金

(鐵道割引利用者(五〇軒以上)四百名に充たさる人員七四名分一名七五錢の割)

收入支出差引無殘

月刊「幼児の母」の計畫に就て (再び)

— 御贊同と御利用を乞ふ —

日本幼稚園協會 倉 橋 惣 三

「幼児の教育」に「幼児の母」といふ一種變つたページのあらはれたことは既にお心づき下さつたと思ひますが、これから毎號つづけてゆきます。

幼稚園が幼児への直接の保育を任務とすると共に、母の教育者、家庭教育の指導機關としての使命をもつべきものであることは、豫て練りかへし本會の主張し來れること、又、皆さまの強く御自覺になつてゐるところであります。

そのためにはいろいろの方法もあり、現に皆さまも、いろいろとお力を注いでゐられること、信じます。月刊「幼児の母」は、その小さき一助もなり度く、皆さまに活用して頂き度くて、生れ出たものです。

一應は「幼児の教育」の頁内に掲載しますが、これを御覽下さつて、皆さまの御園の保護者に預つ御趣旨を以て本會へ注文いたゞきたいのです。するに、本會はその御注文の部數通り抜刷りにして、實費を以てお送りします。それは可愛らしい四頁の母の新聞といつた獨立の形になつて、お手

許へ参ります。そして、お手許から母達の手に渡るのです。世には、母のための讀みものもいろいろあります。が、幼時の母といふ特定の意味をもつものとして、更に、それが、我子の幼稚園から配られるのですから、母の特別の注意をひくことを疑ひません。その上、立讀みしてもすぐ讀み切れる四頁です。忙しいお母さん方にも親しみ迎へて貰へるでせうと思ひます。

實は、こゝにいふものがほしいが、園々で小部數印刷するのも手數であるといふお話を、豫て方々から聞きます。此の計畫は、つまり、そゝいふ方々のための御便利をはかるものご申してもよろしいのですが、本會としては、更に、一園でも多くに御すゝめして、之れによつて、我國の全家庭に、幼児教育の促進と刷新を圖りたいと、熱望し切願して居る次第であります。小さい仕事ですが、お力をおあはせ下さい。

○月刊「幼児の母」頒布規定

- 一、毎月の注文を切を十日とします。(一月は十五日)
- 二、部数、送り先きを明記して、代金と共に御注文下さい。尚「幼児の母」代金なる事を必ず御附記下さい。振替にて御送金の方は本會着迄に比較的多くの日数を要しますから御急ぎの時は爲替の方御便利です。
- 三、十五日に發送します。(二月は二十日)
- 四、御注文は十部を一單位として、實費を左の通り申受けます。

○十部 金貳拾錢

○送料 十部まで三錢

二十部以上送料不要

○十部以下の端数はおこまわりします。

- 五、本計畫の趣旨に全幅の御賛同を下さつて、一ヶ年分を豫約御注文の場合は、事務上最も好都合であります。實はなるべく、そういふ御豫約を多く得たいのであります。途中からでしたら、本年十二月までの計算でお申込み下さつて結構です。

- 六、毎號は、號数を附せず、月順にだけして置きますから、その月の分から御利用下さつても、又、或る月だけの御利用でも、端號さいふやうな形にはなりません。但し、毎月つづけて利用して下さることを望ま

しいことで、そういふ方々のために、毎月に整理保存のための綴り孔をつけて置きます。

- 七、更に甚だ立入つたこのやうですが、御利用の仕組については念のため附記して置きます。即ち一寸氣のつきますだけでも、(イ)幼稚園が保護者に無料配布する場合。(ロ)實費を保護者の銘々の負擔とする場合。(ハ)幼稚園内保護者會或は母の會等が費用を負擔する場合。なごそれ／＼御便宜次第であり得ませう。

「幼児の母」の第一の主旨は、現に幼稚園にある幼児の家庭教育に貢獻したいのでありますが、或は之れを以て、幼稚園外の家庭に廣く働きかけて、幼児期教育の主要性を宣布し、ひいては、幼稚園の正しき意味での宣傳にも用ゐられ得るを考へます。たゞへば、二月、三月號は、幼稚園の理解をすゝめる意味を中心として編輯したいと思つてゐますが、それは、現に幼稚園保護者である家庭にも必要であると共に、入園期の幼児を有する家庭に向つて、廣く配布したいところのものでもありません。

尚ほ「幼児の母」の御注文は東京市小石川區大塚町、東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、日本幼稚園協會へ。



昭和十五年

二月

わが子の幸福

倉橋惣三

わが子の幸福を願はない親はありません。そのためには、どんな工夫をしてでもと思ひます。ところが、どういふことか、ほんとうの幸福なのであらうかといふことは、間違ひがないとも言へません。何を與へても喜ぶのが子どもです。出来るだけほんとうの幸福を與へたいものです。ほんとうの幸福は、今楽しいと共に後のためになることでなければなりません。又、おとなの幸福と子どもとの幸福とは同じではありません。そこで、幼い時は

充分幼い子どもらしくさせて貰ふことが、一番の幸福といふことになりませう。幼稚園で友達と遊んでゐる我子を御覽なさい。眞の子どもの世界で、一ぱいに子どもらしさを樂しんでゐます。この幸福が後のためにならないことがありませうか。生きてゐるものゝ幸福は、ほんとうに生きることです。そして、子どもは心のありたけ力のかぎり遊んでゐる時こそ、ほんとうに生きてゐるのです。これが一番の幸福でないといひ得ませう。

想像の強い子

久米京子

父親タイプライターを打つて居る。幼稚園一年の妹、周圍をビヨーンと跳びはね乍らタイプライターと題して即興詩を歌ふ。「ダン／＼の様にはねかして、チンと鳴つてもうお終ひ。」×××庭で折角採つてテントウ蟲に逃げられた或る朝、登園の途中道端で一匹のテントウ蟲を發見して「あ!! 今朝のお蟲だ。矢張り南が好きだからついて來たんだ。」×××數ヶ月を終たある日食後の團欒、母親「富士山の上にはね、夏でも雪があるのよ」小學一年の兄「フーン」妹傍から「さう!! 私赤ちやんの時、ママのボン／＼の中でその雪見た。」一同洪笑。こうまで自在な彼女の空想には一同あきれて顔見合はずばかり。子供の想像の奔放さは、どこまで發展させていゝものでせうかと、これも顔を見合せて。

幼稚園は

— 何んな教育をするか —

目白保姆養成所長 和田 實

子供は満六歳にならなければ學校へ行かれない。其理由の最も主なもの、子供の發達が未熟だからであります。然らば、一體、何の位の發達があつたらば、子供は學校に行けるのでせうか。今、之れを、手取り早く、箇條書に列擧して見ますと、凡そ次の様なものだらうと思ひます。

- 一、身體の健康が、三十分乃至一時間の作業に、充分堪え得ること
- 二、一と通りの生活様式が、出來上つて居ること、即ち、日本人としての日常生活の仕方が、一通り、躰けられて居ること
- 三、日常言語(成る可く標準語)が、一通りの自由發表の出來る様に、躰

けられて居ること

四、両親や、家族や、師友に對する態度や、作法が、一通り躰けられて居ること

五、自分を環ぐる外界の事物事件に對して、一通りの認識と經驗と、興味とを持つて居ること(勿論、學問的でなくとも)

六、自己の外界を、征服して、生き抜かんとする意欲を持つて居ること

以上、六つの方面が、或程度迄發達して居らぬ限り、學校の勉強は出來るものではありませぬ。以上、六つの方面の發達を計ることが、就學以前に於ける教育であります。此幼児教育は、現在では、家庭と幼稚園とが、共同して、其責任を

二月の御馳走

榮養研究所

佐々木理喜子

仲々お寒い日が多い頃でございますが、體の温まるお汁の様な獻立を考へました。標準は一月號に申上げた通りでございます。

① 白菜と鮭の煮込み

材料 白菜五〇瓦 人蔘二〇瓦 新巻鮭 三〇瓦 甘藷三〇瓦 油二瓦 片栗粉少々以上で蛋白質八・四瓦、温量一七カロリー

調理法 白菜は長さ一寸位に切り、人蔘は織切り、甘藷は一寸位の拍子木に切ります。油で野菜をざつと炒め、鍋に入れ程よい分量の水を加へて軟く煮ます。新巻鮭はきれいに皮附の儘五分角位に切り、鍋に加へて一緒に煮ます。味は鹽、砂糖と極少量の醬油で附けますが、鮭から鹽味が出ますから加減をして下さい。

果たさなければならぬものではあります。特に一方に其責任の多い方面を上げると、家庭では、一、二の方面に於て幼稚園では、五、六の方面に於て、夫々特別に、責任を自覺す可きであると共に、三、四の二つの方面では、殆んど切半的に、半分づゝの責任を感じて欲しい。と思ひます。兎に角、分量的に、其責任を考へずに、凡ては、家庭と幼稚園との共同責任であることには、間違ひないのですから、母親と先生とは、何處迄も協同して、幼児の爲めに盡くされるやうにしたいものであります。

世間には、未だに、幼稚園の教育效果に、疑を持つて居る人が、相當ある様であります。實に認識不足も甚だしいと、云はねばなりません。早い話が、右の六箇條の第三、四、五、六に就いて考へて御覽なさい。是等、母親の母性愛のみに依頼して、満足し得られるでせうか。次に、子供が、三、四歳にもなれば、其生活の範圍は、家庭の範圍を超えて、戸外に、進出

せねば措かぬものであります。是を、子供の慾望に反して、強いて家庭内にのみ留めて置いて御覽なさい。前記の第三、四、五、六項の教育は充分に出来ないばかりでなく、其性格は、我儘となるに極まつて居ます。ところで子供の我儘は、友達遊びによつてのみ正しく直すことの出来るものでありますから、我儘な子供程、早く幼稚園に出すことが、必要であります。

その他いろいろの問題がありますが要するに、幼稚園と云ふものは家庭と協力して、子供の友達遊びと其遊戯生活とを満足せしむることに因つて、初等教育に對する完全なる基礎教育をするものであります。その基礎はどこまでも、ほんとうの基礎で、間にあはせや、見せかけの基礎ではありませぬ。小學校へはいる検査に都合がいゝとか、小學校で習ふことを先きまわりして學んで置くとかいふことではありませぬ。一生を通じて有效なほんとうの基礎です。

出來上りましたら少量の片栗粉を水に溶して加へ、汁を少しドロリとさせます。

② うどんと兎肉の煮込み

材料 兎肉二五瓦、うどん(煮)四〇瓦
玉葱二〇瓦、油少々、トマトソース
三〇瓦、青豆少々
以上で蛋白質八・七瓦、温量一・〇八
カロリー

調理法 兎肉は兎をしめてから、直ぐに血を抜きませんと臭味がつきます。結構に牛豚肉の代用となります。兎肉は普通の大きに切り、ざつと油で炒めます。うどんは市販のうどんの玉を用ひ、一寸位に切ります。玉葱は細く切り、兎肉の次に炒めます。以上の材料を鍋に入れ、程よい水を加へ、更にトマトソースを加へてよく煮ます。味は砂糖、鹽で付けます。煮汁が多すぎると不味くなります。皿に盛附けて、青豆を色どりに添えます。と見た目もきれい、又肉の種類などは、親御さんでも話してお聞かせにならなければ、お子さんは無關心ですから結構召し上ると思ひます。兎肉など、食はず嫌ひをなさらずに、是非お用ひになることをお奨めいたします。

繪本に氣をつけませう

— 母の大きな任務 —

くらはし

幼いお子さんの喜ぶもので、教育的影響の多いものは、玩具と繪本です。その中でも繪本は、世間に甚だよろしくないのが澤山出てゐますので、よく選擇して與へなければなりません。それは母の一つの任務です。さてどういふ繪本がいゝか惡いか。(一)繪柄の卑しいもの。(二)慘酷の繪。(三)あまりに惡ふざけの繪。(四)貴むべきものを馬鹿にしてゐるやうな繪。(五)色をあくどいもの。(六)濃い色で地をべた塗りに印刷したもの。(七)印刷の光るもの。(八)色の上に細い字を印刷したもの。みんな禁物ですね。流行の漫畫もよく注意しないと、子ども純眞な心や、單純な氣もちを害するものが少なくありません。毒のあるお菓子を我

子がたべてゐるのを平氣で見てる親はありますまい。悪い繪本は案外平氣に與へられてゐますが、そつとする程恐ろしいことです。又、どんないゝお菓子でも、むやみにたべさせては腹をこわします。いくらいゝ繪本だといつても、多過ぎては害があります。そこで、お母さんは、たえず、自分でいゝ繪本の選擇に氣をつけなければなりません。子どもが買ふのに任せて置いてはいけません。子どもがほしがらからといつて、やたらに買つてやつてはなりません。その反對に、いゝ繪本を選んで子どもの喜ぶのを見るのは、親の楽しいことですね。

文部省推薦幼兒繪本

(自昭和十四年九月
至昭和十五年一月)

◇ノリモノ チンキ 武井武雄著

◇ムラン コドモ 武井武雄著

◇學校エホン男子家庭の卷 的場朝二著
(鈴木仁成堂發行。金四拾錢)

◇金太郎(幼稚園繪本)幼年繪本研究會編
(富士屋書店發行。金拾錢)

◇桃太郎(兒童繪本)幼年繪本研究會編
(富士屋書店發行。金拾五錢)

文部省に圖書推薦委員會といふものがあつて、次々に良書を選択して公表してゐます。こゝに挙げたのは幼兒向きのものです。年長の兒童のも、おとなのも推薦されてゐます。月々新聞やラヂオで發表されますから、よく御注意になることをお勧めします。

幼時の追憶

その四、就學

抽ノ木の父母

當時の大洲の肱川には今のやうな立派な鐵橋は無かつた。澤山な舟を竝べて、その上に板を敷いた、見るからに風流な橋がかゝつてゐるが、大水の出る度に流されて、あたりの河原も、その度に處々形を變じてゐた。抽ノ木の川べりもいつも浸水して、一番低い家には軒まで水が來た。泥水の上を舟が屋根をすれすれに行き來してゐたことを想ひ出す。平和な田舎も大水で時ならぬ大騒動をしてゐた。小學校へ行く途中に掘切があつて、そこを出るま石屋が三四軒竝んでゐる。今でも石屋はあるが、その一番端に叶さいふ家があつた。父の妹の嫁入り先で、主人はいつも赤い顔をして、酔つぱらつてゐた。三四人の子供があつたが、不思議なこゝには私と同年で同名の子がゐた。早生れであつたのか、同級ではなかつたが、中學にはいつて間もなく亡くなつた。同年同名の子はごちらかと負けるものだ

曾 根 保

さいふ迷信が當つたのださいふ人もあつた。

叶の主人の妹は、當時相當有名なヴァイオリニストに嫁いでゐた。家は大洲から母の里、ハタキへ行く途中にあつた。高い石垣の上に白壁の塀が夕陽に映えて美しい眺めであつた。大きな蘇鐵が繁つてゐた。何處か都會の音樂學校の先生をしてゐられたと見え、休みで歸つたのだと話してゐられたのを記憶してゐる。私がヴァイオリンさいふ樂器を始め見、その音を聞いたのはこの家でとあつた。勉強は琴や明笛が上手ださ聞いてはるだが、幼兒の私にはそれを見たり聞いたたりした記憶が無いやうである。するま、ヴァイオリンが、樂器としては一番最初に私に知られたものらしい。今日、私が「ヴァイオリンが弾けますよ」と言つても殆んど誰も冗談さしか聞いてくれないだらう。尤も近來は手にしたこゝもないが、實は「すばらしい」ヴァイオリンを一つ愛藏してゐるのである。これには一つの物語がある

が、それは後の「代用教員時代」の一項として述べることにしよう。

さて、抽ノ木の父は、役場から歸るに、水を汲んだり、風呂を焚いたり、庭に打水をしたり、通りを掃いたり、少しもぢつこしてゐない人であつた。夕餉の時、ちびちびにお酒を飲んで、赤い顔をして、白い象牙の長いノコ箸を巧みに使つて食事をしてゐられた。夏はお椽で食事をいたゞいてゐるが、頭の眞上には鮎の串刺が吊つてあつた。父は投網の名人で、私も一晚お伴をしたことがあつた。薄暗い、冷い水の中で熱心に鮎を探つてゐられたが、私には退屈の上ないこゝで、一度で懲りごりしてしまつた。

お役所の宿直の時であつたらう。私は父の寢臺に入れて貰つたが、翌朝家へ歸つての話しに、「昨夜は保が寢臺から轉げ落ちてばかりゐるので眠れなかつた」と閉口の體であつた。これが、寢臺に寢た最初の記憶である。役場へは度々お使に行つたので、今でもその建物が朧氣に眼の前に浮んで来る。

役場から少し行くに小學校があつた。柳の多い通りで、お城が東の方に見えてゐた。私はこの小學校へ始めて入學したのである。ズツクの鞆を肩にかけ、袴をはいて通つた。この頃のこゝであらう。近所の女の子が私をからかふ時いつも、「ソデ、タモト、やーい」と呼んでゐた。曾根保をもち

つて思ひついたニック・ネイムだが、私はその機智に少々感服してゐる。私のニック・ネイムはその後、中學校時代には病弱で青白かつたため、「青さん」になり、現在ではSONEのドイツ語讀みに、「象」を通して「ゾーン」になつてゐるらしいが、後の二つともお話にならぬ愚物の考案である。中學校時代の先生に捧呈したニック・ネイムなどには恐ろしく穿つたものが多かつたが、近頃はさういふ風かしら。

小學一年の同級生に中學校の校長さんの息子がゐた。色の聰明な子で、私はとても好きだつた。その頃洋服を着てゐた子供は小學校でこの子唯一人であつた。水兵服を着て、ランドセルを背負つた姿には何とも言へない魅力があつた。家は脇川を渡つた川向ふにあつたが、二三次學校の歸りに連れられて行つたことがある。今は名前も想ひ出せない遠い遠い昔の話になつてしまつた。

母は通りに面した表の間で針仕事をしてゐられた。眉毛を剃り落してゐられた。近頃は眉毛を落した婦人に出遭はないが、その頃はさういふ風習だつたのであらう。眉毛を落した人は母一人では無かつた。母は籠臺の前に坐し、側には大きな唐金の火鉢があつて、それにはいつも鋺が突差してあつた。火鉢の取手には唐獅子が口を開いてゐた。左右對をなして大きな口を開いてゐた。正面の大きな戸棚には仕立物が幾つも並べてあつた。母の内職なのであらう。

おやつ頃の頃になる。私は外から馳け込んで火鉢の横に身體をくねらせて、「ね、おくれよを繰返したものだつた。

母は振り向きもせず、鏝を取つて頬に近づけ、熱し加減を見てゐられた。時には人差指で鏝の腹に觸つてゐられた。ここもあつたが、「ね、おくれよ」の連發に對してきまつて「お暑が濟んだらお正月」を應酬してゐられた。それには今も耳に残つてゐる一つの調子があつた。お店の椽は狭かつた。夕方になる。畳んで掛金にかけるのであるが、この椽に、ちり紙や草鞋を置いて、通りを往くおへんぎさんにお布施をしたものである。小さい子供でも、人に惜しみなく與へる。ここは嬉しさを禁じ得ず、時には通り過ぎて行つてしまつたおへんぎさんを追つかけて施した。ここもあつた。家の前が豆腐屋であり、うきん屋であつた。せいか、おへんぎさんが疲れた足を止める。ここが多かつた。中には目鼻の定かならぬ病人も交つてゐた。鼻の無い人が時々あつたが、その譯を聞いても、母の説明はたゞ恐い病氣のため。いふだけだつた。當世はもうあのやうな怪物は世上から姿を消してしまつたやうである。それさもマスクなき、いふ便利なものが出現して多少見分けがつかなくなつたの。かも知れない。

そんな事情が知らないが、この母が突如として姿を消してしまつた。小學校へ上つて間も無い頃の出來事である。

私にまつては大事件に違ひなかつた。する。程なく船頭さんが數人やつて來て、箆笥や長持の類を運んで行つた。折角なついでに母を失つた子供は、さびしい。幾日かを父。祖母。にいたはられながら過す。ここになつた。程なく丸。齧の美しい母が見えた。初めは、さういふものか、私はな。つかなかつた。二尺。さしを振り廻して叩きつけた。ここもあつた。しかし、母の里に連れて行かれて遊ばして貰つたのは嬉しかつた。大洲から八幡濱へ行く途中に野田。さいふ。村があるが、母の里はその街道筋にあつた。家の前に小川があつて、母の弟が、そこで魚を釣つてくれた。歸る時、御飯をすゝめられて、一杯で止めた。ここ、一杯では腹の下は通れない、一杯。食べるもの。だ。驚かされた。後に私が、代用教員をしてゐた時、郡視學が授業視察に來て、一同を怖がらせたが、それが何。その昔街道の小川で私の爲に魚を釣つてくれた母の弟であつたのには驚いた。

泳ぎを習ふ

尋常一年の夏、私は肱川で泳ぐ。こ。こ。を教はつた。その教授法は巧妙を極めてゐて、自分の子供が近年プールで水泳を習つてゐるのを見て、も。か。し。を禁じ得なかつた。川には大きい友達。數人。あ。五。米。ば。か。の繩を崖から崖へ張り渡し、それを傳つて一方から他方へ到着することを命ぜられた。臆病な私は恐しくて。でも。渡。れ。さ。う。にもなかつ

だが、他の私より小さい子供までやつてゐるのミ、もし大きい子供の命令に反くミ一大事なのであるから、思ひ切つてやるこゝにした。仲間外れにされるこゝは、子供の世界では一番大きな問題であるから、病弱な私なき、いつも大きい子におきかされてゐた。そこに父親の手のミダかぬ教育もあるのであらう。さて恐る恐るその繩を命の繩ミ、一生懸命につかまへて中途まで進んで行つた、バタバタ足で水を蹴りながら。實に必死の業なのである。するミ今迄二人の男の子が張つてゐたその繩が急につかまへやうもなく、弛められてしまつた。今はそんな繩に命を托しては居れない。兩手の力のあらん限り、バタバタ水を掻いて、或は沈み、或は浮き、水も相當に飲んで泳ぎに泳いだ。眼は見えない。しかし努力は報いられて近くの岩に、目的の岩に、到頭かぢりつくこゝが出来た。ぢつミ私の動作を見つめてゐた男の子は「よし」言ひ放つた。アプアプ云つて、水からやつミ顔を上げた私は、半泣になつてゐたが、男の子の賞讃の聲を聞いて、嬉しくなつた。遂に私は泳ぎを教はつたのである。その間實に數分を出でない。泳ぎは正にこの手に限るミ、私は今も確信してゐる。子供の頃、よく人が犬の子を川に捨てるのを見たこゝがあるが、犬もやはり同じやうに泳いでゐる。即ち人間も實際は生れながら泳ぎ得る動物に造られてゐるのである。私は今も、龜山の岩角を想

ひ出して、あの男の子、あの川に感謝をさゝげる。

エアリ・ビーコン

エアリ・ビーコン エアリ・ビーコン

あの楽しい景色！

戀人が私のミころへ登つて來る時

エアリ・ビーコンから見た町や州の

エアリ・ビーコン エアリ・ビーコン

二人寝ころんだ楽しい時よ！

エアリ・ビーコンの羊齒深く

夏の日中を語り合ひつゝ

エアリ・ビーコン エアリ・ビーコン

あゝ私には味氣ない處

エアリ・ビーコンに一人ぼつち

あの人の子を膝にのせて

——チャールズ・キングズレ——

ハイデー

(第二十二回)

津田芳雄譯

あくる日、おひるがすむさぐ、ハイデーはおばあさんの家へ行つた。もう雪がないから、ひきりで行けた。さわやかな五月の風に吹き送られて、足はひきりでに進み、晴れた山道を飛ぶやうに駆け降りるのは、とても氣持がよかつた。

おばあさんはもう起き上つて、いつもの隅つこで紡ぎ仕事をしてゐるが、なんさなく心配さうな顔をしてゐた。昨夜ベーターが、ぶりぶりしながら、フランクフルトから大勢お客さまがやつて來る話をして、もしそんなこゝになれば、その後又そんなこゝが起るか知れたものでないさ云つたので、おばあさんはハイデーが又連れて行かれるのではないか、心配で夜さほし眠れなかつたので

ある。ハイデーは駆け込んで來るさ、早速小さな腰掛けをおばあさんのそばへ持つて來て、夢中でお客さまのお話をしはじめた。けれどもしばらくするさ急にぼつんさ止め、心配さうに訊ねた。

「さうしたの、おばあさん、こんなお話聞いても、おばあさんはちつともうれしくないの？」

「うれしいさも、うれしいさも。お前さんがそんなに喜んでゐるのさもの」

おばあさんは無理にうれしさうな顔をして答へた。

「それでも、なんだかおばあさんは、まだ心配さうだわ。ロッチンマイアさんは、あんなに云つても、やつぱりやつて來さうだからなの？」

ハイディは自分も心配になつて来て、たづねた。
「なんの、なんの、何でもないんだよ。わたしには
はぎんなに辛くつても、お前さんのためにはこの
上もなく結構なごきなんだからね。さあ、せめて
お前さんが今こゝにゐてくれることが、しつかり
わかるやうに、お手々を握らせておくれ」

「おばあさんに辛いごきだつたら、わたしにぎん
な結構なごきだつて、わたし、しないからいい」

ハイディがきつぱりごきさういへば、おばあさん
はなほさら、ハイディがもう快くなつたのでいよ
いよフランクフルトから連れもごしに來るのだこ
いふ確信を深め、ますます心を痛めるのだつた。
けれども、自分があんまり悲しめば、ハイディは
思ひやりの深い子であるから、行かないなごき云
ひ出しては濟まないと思ひ、一生懸命に悲しみを
かくさうごした。それにはたつた一つの救ひがあ
るのだつた。

「ハイディや、わたしに『ものみなはよき實を結
ぶ』といふあの讚美歌を讀んでおくれ」

ハイディは無氣な澄み切つた聲で讀んだ。

ものみなはよき實を結ぶ

ただ頼れ、任せよ我に

我は來ぬ、奇しき癒やし力もて
十重二十重汝をしばれる
縛を解かむとて

「あゝ、これだ、これだ、ぎんなにこれが聞きた
かつたか」

おばあさんの顔からは、深い悲しみのかげが消
えて行つた。ハイディは考へ込みながらちつこお
ばあさんの顔を見てゐたが、

「癒やしの力」つていふのは、おばあさん、痛い
ごころや苦しいごころをなほして、又元氣にして
あげる力のごきなねえ」

ご云つた。おばあさんはさうださうなづき、覺
えておきたいから、もう一度讀んでくれごたのむ
ご、ハイディも、なんでもものごきはきつごおし
まひにはよくなるのだよご受け合つて下さる神様
のごきばがうれしくて、心をこめて、何度もくり
かへしくりかへし讀んであげた。

夕方になつたので、ハイディは山をのぼつて歸
つて行つた。頭の上には後から後から三星が數を
増し、その一つ一つがハイディの胸に、次ぎ次ぎ
に美しい歡びの光りを射し送つてくれているやう
に見えるのだつた。ハイディは見惚れて何度も立

ち止まつてしまつた。一つ殞え、二つ殞え、たうさう空一面に星が輝きわたつた時、ハイディは聲に出して云つた。

「さうよ、わたしたちがさうしてこんなふうれしくつて、なんにも心配しないのか、今わかつたわ、神様がちやんさわたしたちによいこみや美しいこさを、知つてゐて下さるからなんだわ」

家に歸つてみるに、おぢいさんもやつぱり空を見上げて、星を眺めてゐた。まつたく、こんな美しい星空は、近年にないこゝだつた。

かうしてこの年の五月は、毎晩美しい星空がつゞいたが、晝間もそれに劣らぬ氣持のよいお天氣つゞきだつた。おぢいさんは毎朝早く外を眺めては、驚いて叫ぶのだつた。

「こゝしは全く、めづらしい天氣つゞきぢや。草木がぐんぐん伸びるぞ。さうぢや、大將、よく氣を付けぬに、お前の兵隊ごもは、食ひすぎをするぞ」

ペーテルは「よし來た」こいふ風に、鞭を振つて見せた。

木々の緑はいよいよ深まり、五月も過ぎて六月になつた。日は長くなり、暑さも増して來て、お

山は花ざかりで、さきもかもそのいゝ香で一ぱいだつた。かうしてこの月も終りかけたある日、ハイディは家の仕事をすませ、樅の木や、その少し上の方にある半日草の蕾がもう開いたかを見に行かうと思つて、駈け出した。ところが、家の角を曲つたかと思ふに、急にびつくりするやうな大聲をあげたので、おぢいさんは何事か、慌てゝ物置きから飛び出して來た。

「おぢいさん、おぢいさん！」

ハイディは氣狂ひのやうに叫んでゐた。

「早く來てごらんさい、ほら、あそこ、あそこ！」

おぢいさんは傍に並んで、ハイディの指す方をながめた。

奇妙な行列が山をのぼつて來た。先頭には二人の男が山轎かこをかついで來、中に深々ミシヨールにぐるまつた少女が乗つてゐた。その次ぎには、立派な女のひきが馬に乗つて、あたりの景色をたのしさに眺めながら、そばに歩いて來る案内人に話しかけてゐた。そのうしろからは、一人の男が車のついた寢椅子を押して來た。病人はいつもこれにかけてゐるのだが、険しい山道だけ、危い

「ミ思つて山轎にしたのだらう。殿には、人夫が山のやうに外套や肩掛や毛皮を背負つて来た。」

「いらしつたわ、いらしつたわ!」

ハイディはよろこんで跳びまはつた。これこそ、フランクフルトからのお客さまだつたのである。行列はだんだん近づき、たうまう着いた。山轎かきが山轎をおろすミ、ハイディは飛んで行つた。二人の子供たちはうれしそうに抱き合つた。おばあさまも馬から降りて、やさしくハイディの頭を撫でた。それから、お迎へに出て来たおぢいさんミ挨拶をしたが、お互ひにハイディから噂を聞かされてゐるので、まるで古くからの馴染みのやうで、少しも初対面のぎごちなさはなかつた。

御挨拶がすむミ、おばあさまは早速景色をほめはじめた。

「なんて立派な御すまひでせう。この景色を取り入れたところなき、王様だつて羨みますね。ほんたうに、これほごよい景色ミは、思ひも付きませんでした。それに、ハイディちゃん顔いろのいゝこご。——まるで野バラのやうぢやありませんか」

かう云つてハイディを引き寄せ、その生き生きした赤い頬つべたを撫で、やつた。

「まつたく、ここから先きに眺めようかミ迷つてしまひますね。なんていゝ景色なんでせうねえ。」

クララや、あなたはさう思ひますね」

クララはうつかり景色に見入つてゐた。こんな美しいながめがあらうミは、夢にも思つたこごもなければ、まして見たこごなき、あらう筈もないのだつた。ほごぼしり出るやうな歡びの聲をあげた。

「おばあさま、あたし、ずうつこいつまでも、こゝにゐたいわ」

おぢいさんはその間に寢椅子を引つ張つて来て、その上に肩掛けを二三枚しき、クララのそばへ行つた。

「お嬢さんは、馴れた椅子の方が工合がいゝでせう、山轎は硬うござんせう」

さう云つて、軽々ミその丈夫な腕に子供を抱き上げるミ、そつミ寢椅子にねかせ、大事に毛布をかけてやつたり、足が柔い座蒲團の上に来るやうに氣を配つてやつたりして、まるで、これまでずつミ専門に、足のわるい人ばかり手がけて来た人

のやうだつた。おばあさまはびつくりして見てゐたが、

「一體どこでそんな看護學を修めていらしつたのでございませうか。教へていたゞいて、わたしの知つてゐる看護婦たちをみんなそこへ出して、病人の扱ひ方は見習はせたいいくらるですよ、さうしてそんなに御精くわしいのですか」

と訊いた。おぢいさんは微笑ほほみんで、

「わたしのは、習つたさいふより、實地に覺えたのですな」

だが、さういふうちに微笑は消えて、見る見る悲しさうなかげが顔ちうにひろがつた。目の前には、ゐざりになつて癡椅子に癡たきりで、手足も動かせない、苦しさうな顔をしたつづみ昔の中隊長の顔が、まざまざと浮んで來た。それはおぢいさんの若い時ゐた中隊長の隊長でシリイの激戦で負傷して倒れてゐるころをおぢいさんが見付けて、野戦病院にかつぎ込んだのであるが、それ以來、中隊長はほかの者は誰一人寄せ付けないで、息を引き取るまで、つづみおぢいさんの手厚い看護を受けつゞけた。だから今、おぢいさんが足の立たないクララに、こんなにも馴れ切つた手付き

で、細々こま世話をやいてやるのも、いかに自然のこまなのであつた。

空は一點の雲もなく晴れわたり、小屋も樅の木も岩も峯も、鮮やかに照らし出されてゐた。クララには、あんまり美しい景色がそこにもこゝにもいつばいあつて、とても見切れない氣がした。

「ねえ、ハイディ、あたしもあんたと一緒にどこでも歩きまはれるんださ、いゝわねえ。ちよつこでも歩いて、樅の木だの、そのほかいろんなものが見られたら、さんにいゝでせう。あたし、あんたにお話しゝてもらつて、來ない前からこゝのものは何でもよく知つてゐるのですもの」

ハイディは早速、ありつたけの力でクララの癡椅子を押して、樅の木の所へ連れて行つた。クララは今までこんなに高い眞直ぐな幹をした、こんな上にごゞきさうな長い繁つた枝をした木を、一べんも見たこまがなかつた。おばあさまでさへ、子供達について來て、びつくりしてしまつたからである。その青々あざ空さまに伸びた高い梢か、大昔から今まで、何ものにもわづらはされずに、少しも變らず黙々もくもくとして、下の谷や人の往來を眺めて來た大きな眞直ぐな枝をつけた柱のやうな幹

か、されからほめようか迷ふのだつた。

ハイデイは今度はクララの寝椅子を山羊小舎の前へ押して行き、小舎の戸をすつかり開けて、中を見せてやつたが、今は山羊達がペーテルミ山へ行つてゐて留守なので、つまらなかつた。クララは山羊たちが歸らないうちに山を下りなければならぬと悲しがつて、しきりにおばあさまに訴へた。

「ペーテルが山羊をみんな連れて来るどころが見たいのよう、おばあさま」

「見られるものだけを、よく味はつて見ませうね、そして見られないものゝこきは、考へないことにしませうよ」

おばあさまはハイデイの押す椅子のあさからついで行きながら答へた。

「あら、お花！」

クララが叫んだ。

「眞赤なお花が、あんなに澤山！まあ、風鈴草がこつくりしてるわ。あたし、出て行つて摘みたいわ！」

ハイデイはすぐに走つて行つて、大きな花束を作つて来て、クララの膝の上のせてやつた。

「でも、こんなの、何でもなくつてよ。山羊が草を食べに行く山まで行つてごらんさい、それはさつてもすてきよ！赤い矢車菊だの、青い風鈴草だの、金のやうに光る半日草だの、一ミ所に重なり合つて咲いてるのよ。それから、おぢいさんが『光る眼』と呼んでゐる大きな葉っぱのやら、さてもいゝ香ひのする小つちやな花の咲く茶色のやら、いろんなのがあるのよ。あんまりきれいだから、一べん坐り込んだら、動けないくらゐよ。なにもかまが、さても可愛らしくつて、いゝにほひなんですよ！」

ハイデイはまざまざその景色を思ひ出し、自分の言葉につりこまれて、今すぐにも行つて見たくなつた。そのキラキラ光る眼を見てゐるミ、クララにもすぐその思ひが傳はつて、やさしい碧い眼に同じ心をこめて見返すのだつた。

「おばあさま、あたしにもそこへ行けて？ハイデイちゃん、あたしも歩いてあなたと一緒にそこへでも登れるのだつたら、ごんなにいゝでせうねえ」
「わたし、きつミあなたを押して行けてよ。この椅子はさても樂に動くんですよ」

ハイデイはその證據を見せようミ、大變な勢で

押したので、角を曲るべき、も少しで轉がり落ちさうになつた。幸ひおばあさまがすぐそばにゐて、危く止めて下さつた。

その間、おぢいさんはせつせき働いて、テーブルを持ち出して、そのまはりに新しい椅子をまくばり、みんなが外で御飯がいたゞけるやうにした。内では御飯の支度がもう出来て居り、お乳もチーズもすぐに出來た。みんなは大元氣でおひるの食卓についた。

おばあさまは、お醫者様もせんに來た時悦んだと同じやうに、この谷も山も青空も一目に見渡せる食堂のながめに、うつかりこした。氣持のよいそよ風が吹いて來て、樅の木は枝を鳴らして、樂しい伴奏を添へてくれた。

「こんな氣持のいい思ひをしたのは初めてござんすよ。ほんたうに結構ですこゝねえ」

おばあさまは二度も三度もかう云つて感歎し、それから急に驚いて叫んだ。

「まあ、クララ、あなたはチーズのお代りをしてるぢやありませんか」

なるほど、クララのお皿には、こんがりこ狐いろに焼けた二きれ目のチーズが載つてゐる。

「え、おばあさま、ごてもおいしいの。ラガツ温泉の御馳走みんなよりも、まだおいしいのよ」
クララはなほもおいしさうに食べつゞけながら答へた。

「それは結構。召し上られるだけ召し上つて下さいよ。料理はまづくとも、山の空氣が味付けをしてくれますからなあ」

かうして食事は進んで行つた。おばあさまはおぢいさんご大層話が合ひ、次ぎから次ぎへ三話のはづむにつれ、人間や世の中についての意見が、まるで昔からの親友のやうにびつたりご一致するのだつた。時は楽しく過ぎて、やがておばあさまは西の空を見上げながら云つた。

「さあ、そろそろおいこましなければなりませんね。お日様があんなに傾いて來ました。もうぢき馬や山轎が迎ひに來るでせう」

クララはうなだれて、一心に頼むのだつた。
「もう一時間か二時間だけ、ねえおばあさま。だつてまだおうちも、ハイデイのお床も、なんにも見せてもらつてないのですもの。あ、日が暮れるまで、十時間もあるさい、わねえ」

「まあ、あんな無理ばつかり云つて」

おばあさまも、さうは云ふものゝ、中が見たさうだつたので、みんな食卓から立ち上る。おぢいさんはクララの寢椅子を小屋の入口まで押して行つた。椅子の幅が廣くて、入口の戸につゝかへて困つたが、おぢいさんはぢきにクララをがつしりさした腕に抱き上げて、樂々ミ中へ連れて入つた。

おばあさまは家ぢうを一ミわたり見てあるき、なにもかもが小ぢんまりミ片付いてゐるのが非常に氣に入つた。

「あゝ、これがハイディちゃんのお寢間ですね」
さう云ひながら、怖がる風もなく、さんさん梯子を上つて枯草の積んである屋根部屋へ行つた。

「まあ、いゝにほひだこ。ほんたうにくすりですわね、こんなミところで眠るのは」

それから、丸窓のミころへ行つて外を見渡したり、ハイディのすばらしい枯草のベッドを仔細に眺めたりしながら、考へ深さうに枯草のほひのする空氣を心ゆくまで吸ひ込んでゐた。クララもおぢいさんに抱かれて上つて来るし、ハイディも悦んで跳びはねながらついて來た。クララはもう夢中だつた。

「氣持がいゝわねえ。ハイディちゃん！空がま上に見えるのねえ。それに、いゝにほひがするし、椋の木の鳴る音まで聞えるわねえ。あたし、こんな氣持のいゝお寢間、はじめたわ」

おぢいさんはおばあさまを見やつて云つた。

「實はさきほごから考へて居りますのぢやが、もし御異存さへなければ、お嬢さんを私共へおあづけ下さつては如何でせう。必ずめきめきミ丈夫になられますぞ。幸ひ肩掛や毛布なき、きつさり御持參ぢやが、あれで立派な柔い寢床を拵へます。

御世話は萬事わたしがお引き受けしますから、御心配はいりませんわい」

クララミハイディはこれを聞くミ、まるで籠から放たれた二羽の小鳥のやうに喜んだ。おばあさまの顔も、満足さうに輝いた。

「まあ、御親切にありがたうございます。わたしも、こゝにしばらく御預り願ふことこそ、クララに一等必要なことではないかしら。丁度今考へてゐたのですけれど、御迷惑ではないか。實は御遠慮申してゐたのでございますよ。今あなたに、子供の世話なぞまるで何でもないことやうに仰しやつていたゞいて、こんなうれしいことばさ

いません。心から御禮を申し上げます」

おぢいさんは、早速まめまめしく支度をはじめた。まづクララを外の寢椅子にねかせておいて、山ほごもある肩掛や毛布を持つて来た。ハイディはクララについて行つたが、うれしくつてびよんびよん跳びまはり、いくら高く跳び上つても、このうれしさを表はすにはまだ足りない気がした。

おぢいさんは笑ひながら云つた。

「はじめ持つておいでになつた時は、これぢやまるで冬籠りの支度ぢやと思ひましたが、なるほど役に立ちましたなあ」

「まさに先見の明でございませう！」

おばあさまも、愉たのしさに答へた。

「幸ひなにごともなく山路を登つて参れましたからようございしましたやうなものゝ、もし嵐にでも逢つた時のことを思つて、用心をして参りましたのが、今役に立つたのでございませうね」

二人は屋根部屋へ上り、寢床をこしらへにかゝつた。幾枚も幾枚もの肩掛や毛皮を積み重ねて、出来上つたところは、まるで小さな要塞のやうだつた。おばあさまは、一本でも藁が突き刺さるや

うなごこはなにかと、注意深く手で探つて見たが、

おふさんは柔かだなめらかでふかふかしてゐて、少しも突き刺さるものなごなかつた。満足して二人が降りて見るに、子供達はキャッキヤツミ笑ひながら、クララがこゝにゐる間、毎日朝から晩まで何をして遊ばうかさいふ相談をしてゐた。

するにクララがいつまでこゝにゐられるかさいふこごが問題になり、子供達がおばあさまに訊ねるに、おぢいさんに訊いてごらんさいと云はれ、

おぢいさんからは、まづ一ヶ月は試しに山の空気に馴染んでみなければ、さいふお返事をもらつた。子供達はそんなに長く一緒にゐられようとは思ひもかけなかつたので、手を叩いて大よろこびだつた。

山轎かごかき馬か案内人が迎ひに来たが、山轎はすぐかへして、おばあさまは山を降りる支度をはじめた。

『さよなら』ぢやないわねえ、おばあさま。時々あたしたちがさうしてるか、見に来て下さるでせう。たのしみにして待つてますわ、ねえハイディちゃん？』

ハイディは今日はいあんまりうれしいこごづくめ

なので、もうお返事も出来なくて、たゞ跳び上つて見せた。

おばあさまが遅しい馬に跨るゝ、おぢいさんは手綱を取つて峻しい山路を下つて行つた。おばあさまの辭退するのを押しこめ、坂道が急で危いから、デルフリまで送つて行く云つてきかなかつた。

片田舎のさびしい村であるデルフリに、一人ぼつねんごゝあるのも退屈なので、おばあさまはラガツ温泉へ引き揚げ、そこから時々山へ訪ねて来ることに決めた。

おぢいさんが歸つて来るより先きに、ペーテルが山羊をつれて降りて來た。ハイディの姿を見るゝ、山羊たちは轉がるやうに飛んで來て、またゝくうちにハイディの寢椅子にねたクララのまはりを取りまいてしまひ、我勝ちに頸をすり寄せて來た。ハイディはそれをいちいちクララに引き合はせ、名前を教へてやつた。ぢきにクララは、まへから逢ひたがつてゐた小さな「ゆき」や元氣な「ひわ」や、お行儀のよいおぢいさんの二匹や、あの「トルコ人」はもちろんのこと、そのほか大勢の山羊たちにお友達になつた。ペーテルはその間、わきの

方からじろじろながめてゐるが、時々クララをうらめしさうに睨み付けた。二人が大きな聲で、

「さようなら、ペーテル」

さ呼んでも、ペーテルは返事もせず、空氣を眞二つに裂くまじき勢でぷりぷりな鞭を振りまはし、それから、あまをも見ずに山羊たちを従へて駆け降りてしまつた。

さていよいよ、クララがその日いちんち山で見たものゝ中でも一等美しいものが、日も暮れ方になつて、やつて來た。クララは枯草の屋根部屋で、大きなふかふかした寢臺にねて、丸窓から輝く澤山の星を眺めてゐるが、急にうれしさうに、そばに立つてゐるハイディに呼びかけた。

「ねえハイディ、あたしたち、まるで高い馬車に乗つて、まづすぐに天へ走つて行つてゐたいね」
「ほんたうね。あんた、お星様がさうしてあんなにうれしさうにわたしたちを見下ろしながら、こつくりしてるか、知つてゝ？」

「知らないわ。さうしてなの？」

「それはね、お星様はみんな天國にゐるでせう？だから、神様がなにもかもよくして下さつて、わたしたちは何にも心配しなくてもいゝ、おしまひに

はみんな神様がよくして下さるんだ、つてこまをちやんご知つてるからなのよ。だからあんなに、いつもうれしさうなのよ。こつくりして見せるのは、わたしたちにもうれしくなつてほしいからなのよ。だげぎ、わたしたちは神様が覚えてる下さるやうに、しよつちうお祈りしなきゃならないのよ。お祈りをすれば、わたしたちも、先きのこまを何にも心配しないで、いつも大丈夫な氣持でゐられるのよ」

二人の子供達はお床の上に坐つてお祈りをした。それがすむぎ、ハイディはその丸々した小さな腕に頭をのせて、すぐにすやすや眠りはじめたが、クララはこんな高いところでお星様と一緒に眠るのは始めてなので、めづらしささうれしさで、なかなか眠れなかつた。今までは、お星様なごめつたに見たこまもなかつた。夜、外へ出掛けるこまは決してなかつたし、家では日の暮れないうちから、カーテンが深々垂れこめてゐるたからである。目を閉ぢるこま、もう一べんだけ、あのさりわけよく光る二つの大きなお星様が、まだ自分を見下ろしながらハイディの云つたやうにこつくりしてゐてくれるかを確かめて見なくてはならな

いやな氣がして、又しても目を開けるのだつた。するご必ずその二つは、いつも同じ所で光つてゐた。クララはその美しいキラキラ光つてゐる二つの顔を、いつまで見つめてゐてもまだたんのうし切れない氣持だつたが、そのうちにクララの眼はひざりでにふさがり、やがてその二つの大きなつかしいお星様が、まだぢつと見守つてゐてくれる夢路をたぎつてゐた。

敏降り鹿島の神を祈りつ、

皇御軍に我は來にしを。

天地の神を祈りて幸矢抜き

筑紫の島を指して行く我は。

—萬葉集より—

保育實習科新卒業者

東京女子高等師範學校保育實習科は昭和十五年三月、左の二十五名の新卒業者を保育界に送り出さうとしてゐます。皆それ〴〵適當な働き場所を得て斯界の爲熱心にその職に従事し度い希望に燃えてゐます。

氏名	出身校	生年月日	氏名	出身校	生年月日
伊藤 逸子	廣島縣立三原高等女學校	大正十一年七月十二日	津村 満喜子	東京 惠泉女學園	大正十一年三月十二日
大瀧 照子	茨城縣立下館高等女學校	大正十年十月十八日	辻 繁	東京 櫻蔭高等女學校	大正十年五月三十一日
桂 幾子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正十年八月三日	手賀 すみ	群馬縣立前橋高等女學校	大正十年六月二十三日
川口 幸子	長野縣立長野高等女學校	大正十一年九月二十七日	永田 ふみ	東京 百合高等女學校	大正十年十二月二十一日
久保 紀子	愛媛縣立松山高等女學校	大正十一年一月十五日	廣瀬 たみ	東京 千代田高等女學校	大正十一年三月二日
小橋 爽子	岡山縣 山陽高等女學校	大正十年十二月十五日	水原 富彌代	和歌山縣立和歌山高等女學校	大正十一年一月二日
清水 明	宮城縣立第一高等女學校	大正十年十月十一日	宮原 恭子	和歌山縣立和歌山高等女學校	大正十一年一月二十三日
島田 文子	靜岡縣立沼津高等女學校	大正十一年二月二十八日	森 葉津子	大阪府立夕陽丘高等女學校	大正十年九月五日
白石 覺子	東京府立第五高等女學校	大正十年五月三十日	山本 美代子	神奈川縣立橫濱第一高等女學校	大正十年十二月二十八日
杉 園子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正十年六月二十六日	吉田 トミ	日本女子大學校附屬高等女學校	大正十年十二月五日
杉江和歌子	茨城縣立水戸高等女學校	大正十二年一月十七日	李 順伊	朝鮮京畿高等女學校	大正六年三月十二日
相馬 誠子	名古屋市立第一高等女學校	大正十一年十一月廿五日	林 秀英	臺灣臺中州立彰化高等女學校	大正十二年一月十日
			若宮 梅子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正十一年一月二十一日

倉橋惣三編 (新刊)

新體幼稚園唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金七拾錢

目 日本国旗日の丸の旗
次 道 ぶ し ん
倉橋惣三 井上武士 倉橋惣三 井上武士
作詞 作曲 作詞 作曲

い う び ん や さ ん
弘田龍太郎 作詞 作曲
渡し場の船頭さん 倉橋惣三 作詞 作曲
中山晋平 作詞 作曲
火消しのちぢさん 倉橋惣三 作詞 作曲
小林つや江 作詞 作曲

日本幼稚園協會編 (新刊)

幼稚園新唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金五拾錢

目 村 だ か
小松耕子 小松耕子
作詞 作曲
次 雨 杉山米子 小松耕子
作詞 作曲

ほ た る
青山綾子 作詞 作曲
ふ し ん 場 小松耕子 作詞 作曲
氏原銀 作詞 作曲
小松耕子 作詞 作曲

○この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるゝことを期待してゐる。

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽一
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

第一條 本會ハ幼児教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児教育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關係シテ種種ノ便宜ヲ受ク

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ

第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

會ノ開催

一、雜誌發行(毎月一回)

一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行

一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介

一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長 一名 會務ヲ總理ス

主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ジ

第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス

第十二條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ

第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

一ヶ月分	金參拾五錢	特等面一頁二等面一頁
半ヶ月分	金貳圓拾錢	金貳圓拾圓一頁拾圓
六ヶ月分	金貳圓拾錢	金拾五圓御斷り
拾貳冊分	金四圓貳拾錢	神田區駿河臺ノ三品田廣告社に御申込下さい
拾貳冊分	金四圓貳拾錢	

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)

昭和十五年一月二十八日印刷納本
 昭和十五年二月一日發行
 幼兒の教育 第四十卷 第二號

不許複製 禁止轉載

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
 發行所 倉橋 惣三
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷者 柴山 則常
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷所 會社 杏林 舎

發行所 日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
 振替口座東京一七二六六番

注 文 規 定

一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。
 (郵券代用の場合には横切)割増
 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし
 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます
 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帯封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます
 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます

嬉しい手技材料並に表簿類

◇繪馬額——厚紙製の繪馬、クレオン・貼紙等でお子達自身が意匠するもの
一〇枚 金三十

◇菱形——赤・白・草三色の菱餅型の厚紙莖紙にお雛様を折つて貼る
一〇枚 金三十五

◇屏風形——雛祭やお人形遊用金屏風、之に貼紙の櫻その他意匠するもの
一〇枚 金三十五

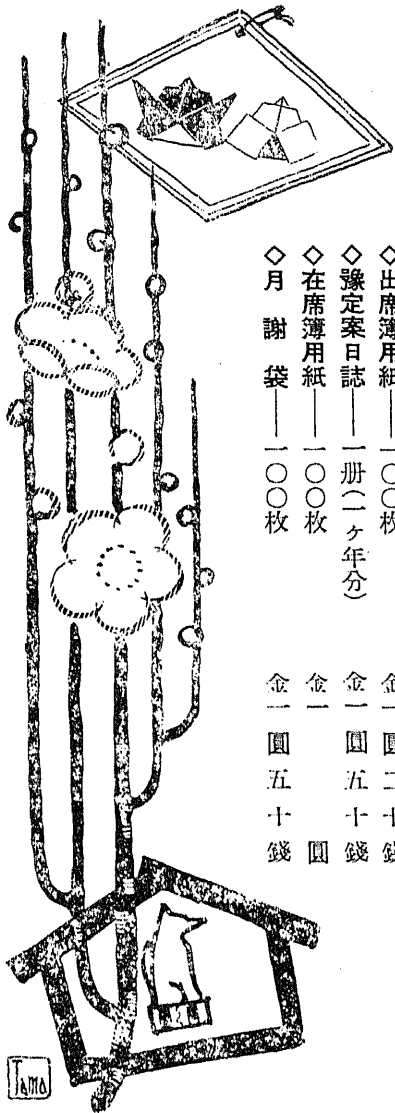
◇出席カード——武井武雄先生揮毫の美しいカード、毎日の出席の貼紙で美しいカードになる仕組、家庭通信欄、幼児發育標準表を添ふ
十二枚一組(二人一ヶ年分) 金十五

◇出席簿用紙——一〇〇枚 金一圓二十

◇豫定案日誌——一冊(二ヶ年分) 金一圓五十

◇在席簿用紙——一〇〇枚 金一

◇月謝袋——一〇〇枚 金一圓五十



AMMO

所行發

館ルベール 社會式株

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社本
番七二八三(24)話電・五町後備・區東・阪大 店支
番八三九一(24)話電

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
(毎月一回發行)

昭和十五年二月二十八日印刷納本

定價參拾五錢